福崎町埋蔵文化財調査概要報告3

－銀ビル福崎店新築工事に伴う緊急発掘調査概要報告－

南田原桶川遺跡

1999年3月

兵庫県神崎郡

福崎町教育委員会

南田原桶川遺跡遠景

あ　い　さ　つ

近年の福崎町における店舗進出は目覚ましいものがみられ、周辺の様相は一変しています。今回の調査では安徳寺をはじめ桶川の泉に関する可能性が強いものが見つかり、安徳寺を考える上での貴重な資料を得た意義は大きいと考えます。

この度の銀ビル福崎店建設に際してご理解とご協力を賜り、この報告書の成果が得られたことは、地域の歴史理解には欠くことのできないものと考え、さらに、これらの資料が歴史理解の一助となれば幸いです。

最後になりましたが、調査整理を通じてご理解・ご協力を賜りました(株)銀ビルストアーをはじめ関係機関並びに関係諸氏には厚くお礼申し上げます。

平成11年3月

福　崎　町　教　育　委　員　会
福崎町教育長　　吉　識　正　明

例　　言

1. 本書は、(株)銀ビルストアーが行う福崎店新築工事に伴う、兵庫県神崎郡福崎町南田原字桶川に所在する南田原桶川遺跡の緊急発掘調査概要報告書である。
2. 調査は、(株)銀ビルストアーの依頼を受け福崎町教育委員会が主体となり実施した。
3. 経費は確認調査は教育委員会が負担し、本調査は(株)銀ビルストアーが負担した。
4. 確認調査及び本調査は以下の通りである。

確認調査	平成10年3月6日
南田原桶川遺跡発掘調査	平成10年4月16日～平成10年4月17日

5. 調査体制は、以下の通りである。

平成9年度確認調査	平成10年度発掘調査
調査事務局	調査事務局
教育長　吉識　正明	教育長　吉識　正明
社会教育課長　北山　正和	社会教育課長　北山　正和
係長　松岡　英二	課長補佐　松岡　英二
主事　出田　直	主査　出田　直

調査担当　　調査担当

調　査　員　出田　　直　　調　査　員　出田　　直

調査補助員　五十川　満　　調査補助員　五十川　満

整理作業は、出田　直 (福崎町教育委員会) が担当し、五十川、谷川晴彦 (神戸学院大学) の補助を得た。

6.　挿図中に使用している方位は基本的に磁北を示している。標高は福崎町建設課設置のK.B.Mを使用した。

7.　溝に　SD　　pitに　P　　土坑に　SK　　と略号を付した。

8.　航空写真は、兵庫スカイフォトサービスが撮影を行った。

9.　樹種同定は㈶元興寺文化財研究所に委託した。

10.　本書の、執筆は一部五十川が行い、主として出田が行った。また、第3章第2節第4項の内、旧石器の部分は大谷輝彦氏 (姫路市教育委員会) に依頼し実測及び報告文をいただいた。

報告書の編集は、出田が行った。

11.　遺構・遺物の実測、写真、製図は出田が行い、五十川、谷川、上月基子 (大阪芸術大学)、三船裕崇 (竜谷大学)、三船耕平 (京都大学) の協力を得た。

12.　現地調査作業には下記の方の協力を得た。(順不同・敬称略)

大平　　茂、長谷川義信、長谷川　豊、山田　正英、松岡　　正、柳田　春孝、柳田　敏郎
上月　基子、北村　佳世 (姫路獨協大学)、兵庫県教育委員会、(株) 銀ビルストアー
鎌谷事務所、生田建設株式会社、大島建設株式会社、

13.　整理作業に関して下記の方の協力を得た。(順不同・敬称略)

森下　大輔、宮原　文隆、大谷　輝彦、井守　徳男、櫃本　誠一、村上　泰樹、神戸　佳文
松井　良祐、小栗栖健治、南　　憲和、振角　卓哉、土橋　　誠、中村　信義、高橋　晦明
高岡　利明、林　　関夫、三船　裕崇、三船　耕平、福永　知美、谷川　晴彦、桜井　智子
伊藤美砂子、上月　基子、兵庫県立歴史博物館、神崎郡歴史民俗資料館、安　徳　寺
吉　田　区

本文目次

あいさつ

例　言

第１章　南田原桶川遺跡の概要…… 1

第１節　調査に至る経緯…… 1

第２節　南田原桶川遺跡周辺の地理的環境…… 3

第３節　南田原桶川遺跡周辺の歴史的環境…… 5

第４節　安徳寺と桶川の泉…… 8

第２章　確認調査……11

第１節　調査の方法……11

第２節　確認調査概要……11

1　調査区……12

2　遺構……16

3　遺物……16

第３節　まとめ……21

第３章　平成10年度南田原桶川遺跡発掘調査概要……22

第１節　調査に至る経過……22

第２節　調査概要……22

1　調査方法……22

2　層　序……23

3　遺　構……25

4　遺　物……29

第３節　まとめ……34

第４章　分析結果……40

第１節　樹種鑑定報告……40

1　出土場所と出土遺物……40

2　鑑定依頼……40

3　樹種鑑定報告……40

4　結果より……41

写真目次

写１　八千種庄北挟遺跡…… 5
写２　八千種庄北挟遺跡（落とし穴）…… 5
写３　弥生時代のガラス玉（上大明寺遺跡）…… 6
写４　妙徳山古墳…… 6
写５　大塚古墳…… 6
写６　加治谷薮下五反畑遺跡（カマド）…… 6
写７　安徳寺…… 8
写８　有井堂…… 8
写９　桶川の泉…… 8
写10　金銅仏 (地蔵菩薩)…… 9
写11　桶川の泉（石造薬師如来）…… 9

挿図目次

図１　銀ビル計画図…… 1
図２　福崎町位置図…… 2
図３　地形分類図…… 2
図４　主要遺跡分布図…… 4
図５　小字図…… 7
図６　調査区位置図（確認調査）…… 11
図７　基本層序…… 12
図８　土層図…… 14
図９　土層図…… 15
図10　確認調査出土遺物…… 18
図11　確認調査出土遺物…… 20
図12　調査区位置図(本調査)…… 22
図13　調査区 (上層遺構)…… 23
図14　遺構図・土層図…… 24
図15　遺構図Ｐ－１…… 25
図16　遺構図Ｐ－２…… 25
図17　遺構内出土遺物…… 26
図18　包含層出土遺物…… 27
図19　包含層出土遺物…… 28
図20　包含層出土遺物…… 29
図21　包含層出土遺物(カマド)…… 31
図22　石器…… 33
図23　石…… 33
図24　樹木概要図…… 40

表目次

遺物観察表…… 36

図版目次

カラー図版　南田原桶川遺跡遠景

図版１　南田原桶川遺跡 (確認調査)
　上　作業風景
　中　作業風景
　下　作業風景
図版２　上　調査前の状況
　下　調査区１
図版３　上　調査区２
　下　調査区３
図版４　上　調査区３
　中　調査区３ｐｉｔ検出状況
　下　調査区３ｐｉｔ完掘状況
図版５　上　調査区４
　中　調査区５
　下　調査区６
図版６　上　調査区７
　中　調査区８
　下　調査区９
図版７　上　調査区10
　中　調査区11
　下　調査区12
図版８　上　調査区13
　中　調査区14
　下　埋め戻し後の状況
図版９　確認調査出土遺物
図版10　本調査
　上　調査前の状況
　中　作業風景
　下　上面検出状況
図版11　上　上面、溝検出状況
　下　上面、溝完掘状況
図版12　左　遺構検出状況
　右　遺構完掘状況
図版13　左　ｐ－1、２遺構検出状況
　右　ｐ－1、２遺構完掘状況
図版14　上　ｐ－１柱根出土状況
　中　ｐ－２柱根出土状況
　下　ＳＤ８遺物出土状況
図版15　上　ＳＤ８完掘状況
　中　調査区土層堆積
　下　調査区土層堆積
図版16　遺構内出土遺物
図版17　包含層出土遺物
図版18　包含層出土遺物
図版19　遺構内出土遺物

第１章　南田原桶川遺跡の概要

第１節　調査に至る経緯

平成９年度に銀ビルストアー建設に関わる庁内協議が行われ、周辺に安徳寺をはじめ、桶川の泉等が存在することから文化財調査の必要性を回答した。その結果、平成10年２月18日（水）に鎌谷事務所より町教育委員会に文化財調査の問い合わせがあり、同23日（月）に事前調整協議を行った。

確認調査を行うに当たっての書類の提出を依頼し、さらに、地権者の承諾書も事前に提出を受けた。確認調査は３月中に実施することとし、確認調査の方法、期間、調査経費、今後の取り扱いについての協議も行った。

確認調査は同３月６日（金）に実施した。（第２章参照）

その結果を受けて、（株）銀ビルストアーの代表との協議を行い、一部に遺跡の範囲を含むために本調査の必要性がある旨を伝えた。遺跡に該当する場所はほとんどが駐車場になるために盛土工法による措置により地下遺構には支障をきたさないために現状保存が可能であり、一部道路拡張及び排水路に該当する部分に関して調査の必要性があると判断された。

遺跡の取り扱いは兵庫県教育委員会と調整しながら進め、57条の２の通知及び、遺跡の破壊される恐れのある部分の調査に対して98条の２の報告を行い、同年４月16日（木）～17日（金）にかけて調査を行った。

その後、遺物の整理をはじめ報告書作成は順次行った。

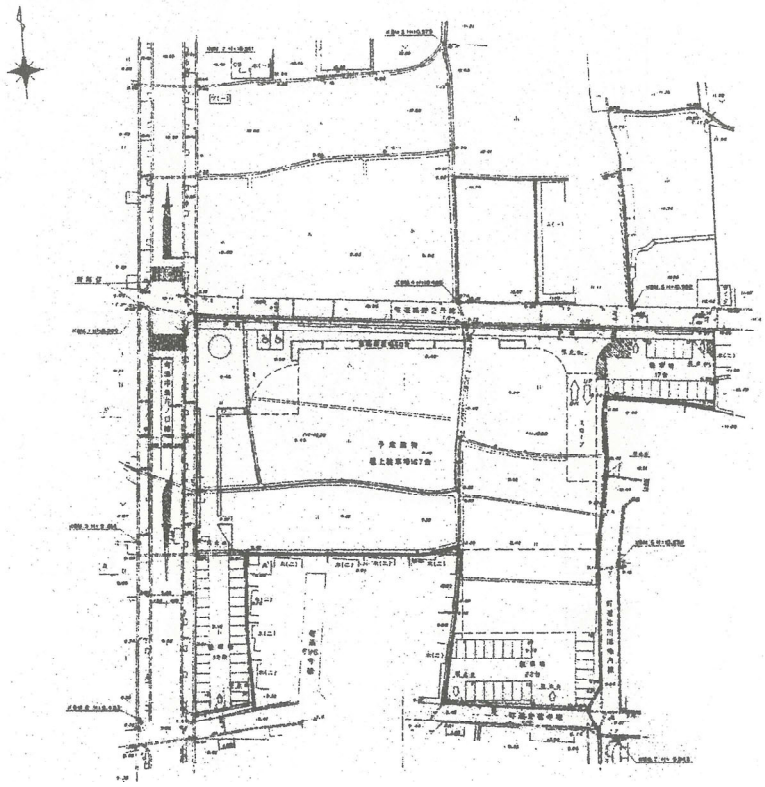


図1　銀ビル計画図

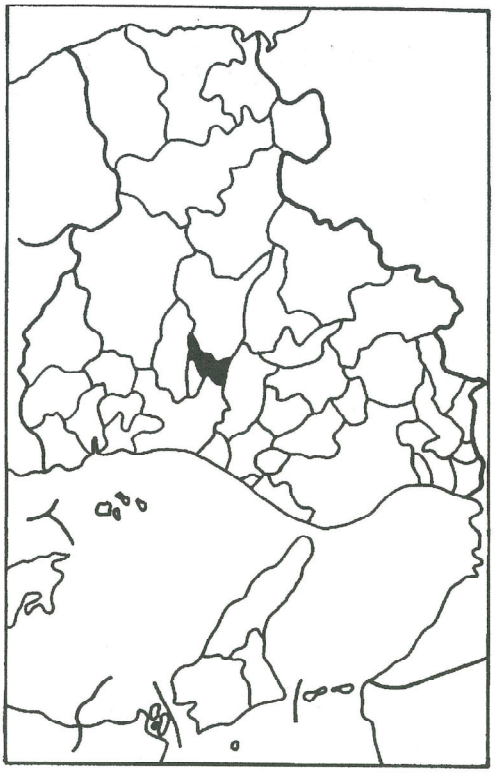


図２　福崎町位置図

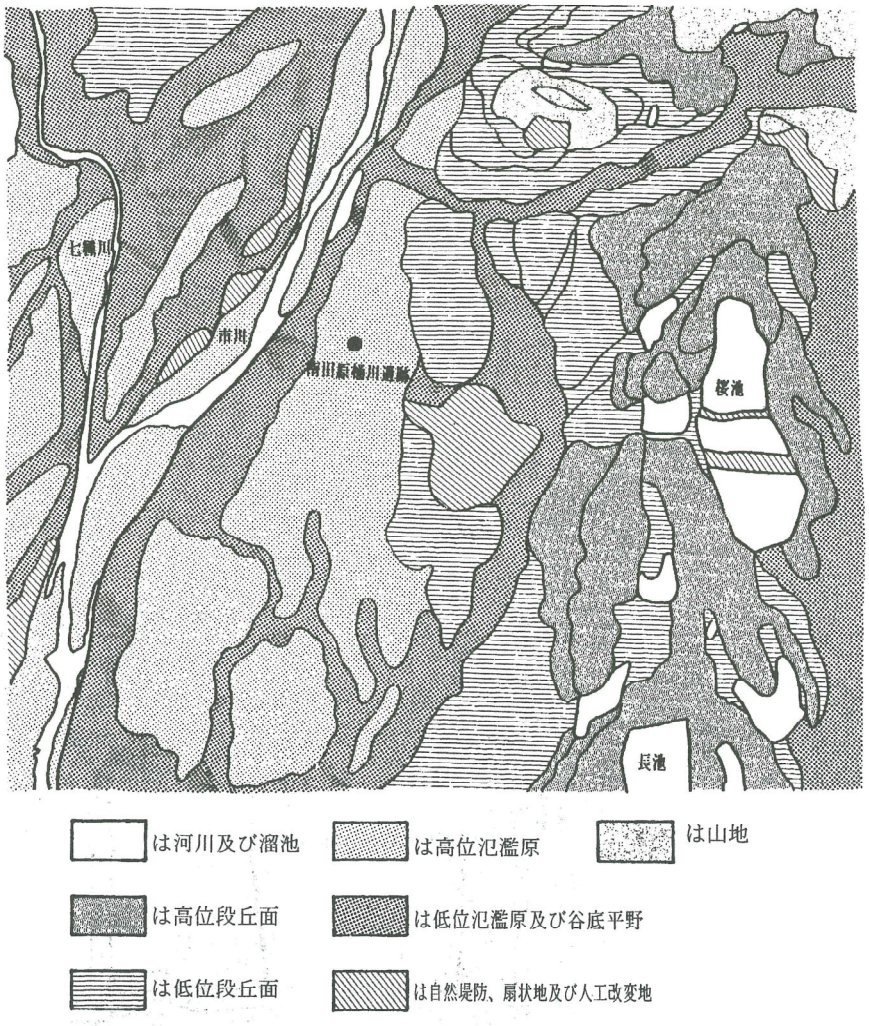


図3　地形分類図

第２節　南田原桶川遺跡周辺の地理的環境

福崎町は播磨平野の中央部にほぼ位置し、総面積45.82㎢を有する。町の中央を２級河川の市川が南流する。市川や加古川は河岸段丘の発達したところとして知られているが、福崎町も市川の中流域に属し、その東西は河岸段丘が発達し、特に東岸で発達した状況が見られる。

福崎町の東西には1級の活断層として知られる山崎（安富）断層が見られ、それ以外にも市川町と接し南北に走る笠谷断層やその他の推定断層がみられる。山地の特徴も山崎断層を境に北に中央山地、南に西播山地が見られるといった地形を呈する。

それらの断層部分には谷底平野が形成され、その間を中小の河川が流れる。その両岸は氾濫原として位置付けられ、それらの場所が平坦地となり現状では水田や宅地となっている。(1)

福崎町の変貌は近年著しく特に中国縦貫道、播但連絡道の建設とそれに伴うインターチェンジ建設以降の変貌は著しい。これによって店舗や工場の進出は目覚ましいものがあり周辺部分は水田が広がる田園地帯よりも都市化した様相を呈している。

調査区周辺も地形は現状では水田が広がる様相を呈するが周辺は店舗建設や宅地開発の波におされて都市化の傾向を見せる。地形的には高位の氾濫原として位置付けられる場所であり市川並びに雲津川が形成したものと考えられる。このような氾濫原の中にも微高地が認められ、その部分に遺跡が求められる。

調査区の西には安徳寺が東には桶川の泉が存在し、これらも微高地上に位置しているものと考えられる。

(1)　田中眞吾「福崎町とその周辺の自然に関する資料」『福崎町史』第三巻資料編Ⅰ　1990年　福崎町

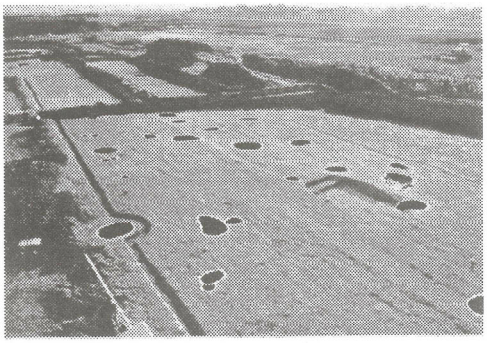
図4　主要遺跡分布図

1. 南田原桶川遺跡　2. 西田原前田遺跡　3. 西田原上野田遺跡　4. 下大明寺遺跡
5. 上大明寺遺跡　6. 宮山遺跡 (土器棺出土地)　7. 西広岡遺跡　8. 北広岡遺跡
9. 北野散布地　10. 南田原条理遺構　11. 石棺　12. 石棺　13. 有舌尖頭器出土地
14. 南田原中野田遺跡

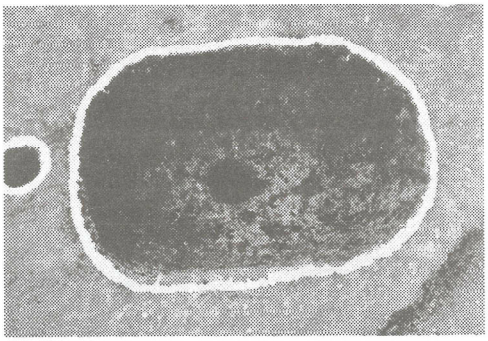
第３節　南田原桶川遺跡周辺の歴史的環境

町内全般の歴史的環境を見ながら今回関連のある雲津川流域の歴史的環境を概観したい。

福崎町で見られる最古級の遺物は、河岸段丘上に位置する大門遺跡や上大明寺遺跡から旧石器が出土している。[12] 西光寺面と呼ばれる段丘上からは有舌尖頭器が地元の小学生によって採集された。[13] 縄文時代になると福崎町でも山地に近い場所で遺跡が見られるようになってきた。発掘調査の関係上、市川の東岸の遺跡調査が進展している。このために、縄文遺跡は東岸に多く知られるようになった。縄文前期の遺跡としては、西大貫遺跡、[14] 南田原長目遺跡[15] から土器片が出土しているに過ぎず、次に続く加治谷大垣内遺跡からは土坑内より土器と共に石匙が出土した。[16] 周辺の埋土より石鏃等も採集されている。後期には西田原穴田遺跡、加治谷薮下・五反畑遺跡、[17] 八千種庄古屋敷遺跡、[18] 北挟遺跡（写１）に遺物の出土が見られる。薮下・五反畑遺跡からは土器と共に溝状遺構から砥石が出土し、八千種庄古屋敷遺跡からは、石鏃や石匙が出土している。八千種の両遺跡からは狩猟用の落とし穴が確認された（写２）。ここからは、住居跡は未検出である。晩期には大門岡ノ下遺跡[19] から竪穴住居が検出され中から土器と共に石棒が出土している。縄文祭祀を考える上での一資料を提供してくれた。東岸での縄文時代の遺跡は加治谷から田尻、辻川を経て流れる雲津川周辺の遺跡が顕著に確認されている。一見して古い時代の遺跡は谷の奥に形成され、雲津川の下流になるほど新しい遺跡が形成されている状況がみられる。



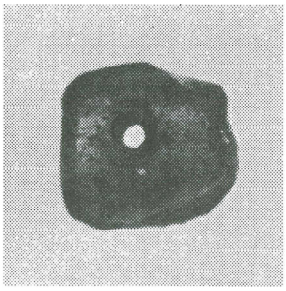
写１　八千種庄北挟遺跡



写２　八千種庄北挟遺跡（落とし穴）

市川東岸の調査は圃場整備に伴う大規模開発によるものでありそれに伴う成果の現れと言ってよい。それに対して市川西岸の調査は開発に伴う際のものは少なかったようである。ただ、縄文遺跡は高岡林谷遺跡から石匙の出土が伝えられており、縄文遺跡の存在を示している。その他のものとしては高岡矢口遺跡から刃器が出土しており散発的ではあるが認められる状況下にある。

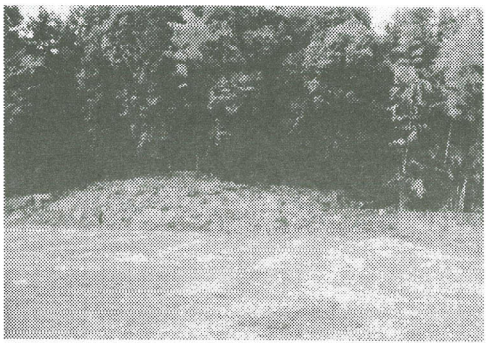
弥生時代においては、前期の遺跡は今の所確認されていないが、八千種庄北挟遺跡から前期に属する可能性のある土器片の出土がある。中期以降においては遺跡数の増加は播磨地域と同じような傾向を見せ比較的多く見られるようになる。遺跡の立地も段丘上を中心に認められ、環濠が確認された南田原長目遺跡や円形の周溝墓が確認された北野寺西遺跡、[20] 円形の竪穴住居からガラス玉が出土した上大明寺遺跡[21] がみられる（写３）。この他にも中小河川の流域に形成された中期の集落も確認されており、縄文時代の項で見た雲津川流域にも多くの弥生中期の



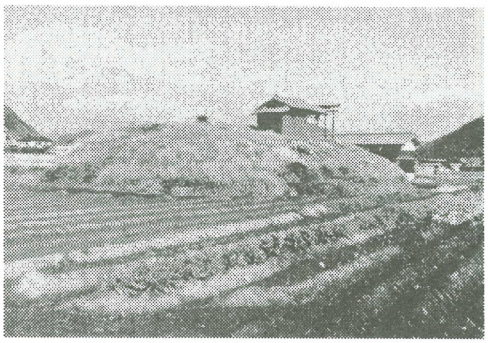
写３　弥生時代のガラス玉
（上大明寺遺跡）

集落が形成されている。これに続く後期の遺跡も同様にみられるが、後期に出現する集落と中期から後期へとつながる集落とに別れる。前者では南田原中野田遺跡[12]が知られ、後者では上大明寺遺跡等が知られている。

古墳時代では町内唯一の埴輪をもつ古墳として知れる相山古墳が見られ、それ以降のものとしては後期古墳に属する円墳が単独ないしは２～５基程度のまとまりをもつ群集墳として存在している。市川東岸では市川流域でも有数の規模の横穴式石室を有する妙徳山古墳（写４）、大門池ノ下古墳（消滅）が知られ、対岸では大塚古墳が見られる（写５）。６世紀代には市川中流域に12m前後の規模を有する石室を持つ古墳が存在した。[13] 古墳時代の集落としては縄文時代、弥生時代を通じて見られる加治谷薮下・五反畑遺跡が知られ、方形の竪穴住居跡が３棟みられ、内１棟にはカマドが見られる（写６）。また、3×3間と3×2間の倉庫と考えられる掘立柱建物も確認された。この集落は妙徳山古墳の時期と同様で関連性のある集落と考えられる。[14] 古墳時代の遺跡は雲津川下流域からは現在のところ確認されていない。

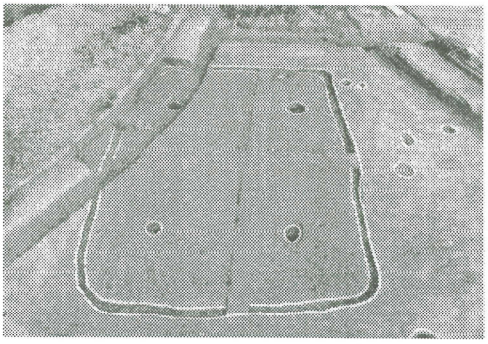


写４　妙徳山古墳



写５　大塚古墳

古墳時代以降、奈良時代の遺跡としては遺物が散発的に見られるが、窯跡と考えられるものに八千種福井谷窯[15]が知られ、北野嶽ノ下遺跡にも窯が存在したことを示す遺物の出土が見られる。



写６　加治谷薮下・五反畑遺跡（カマド）

平安時代から中世にかけての遺跡は全域的に見られ、雲津川流域でも上流域の加治谷垣ノ内遺跡、大垣内遺跡にもみられ中流域の薮下・五反畑遺跡、大門岡ノ下遺跡にも見られる。下流域には全時代を通じての遺跡の存在は知られていないが近世集落の成立と関連性のある遺跡の存在は考えられる。

(2)　『福崎の埋もれた歴史Ⅰ～田原地区～』1998年11月　町立神崎郡歴史民俗資料館

(3)　『福崎町文化財だより④』1993年8月　福崎町教育委員会ほか

(4)　(2)に同じ

(5)　松本正信「福崎の原始・古代・中世資料」『福崎町史』第三巻資料編Ⅰ　1990年　福崎町

(6)　『加治谷越前・大垣内・前田遺跡現地説明会資料』1995年7月　福崎町教育委員会

(7) 『加治谷薮下・五反畑遺跡現地説明会資料』1997年8月　福崎町教育委員会

(8) 『八千種庄古屋敷遺跡現地説明会資料』1997年12月　福崎町教育委員会

(9) 出田直『大門遺跡・大門岡ノ下遺跡』福崎町埋蔵文化財概要報告1　1993年3月　福崎町教育委員会

(10) (2)に同じ

(11) 『西広畑遺跡・上大明寺遺跡現地説明会資料』1994年9月　福崎町教育委員会

(12) (5)に同じ

(13) (5)に同じ

(14) (7)に同じ

(15) (5)に同じ

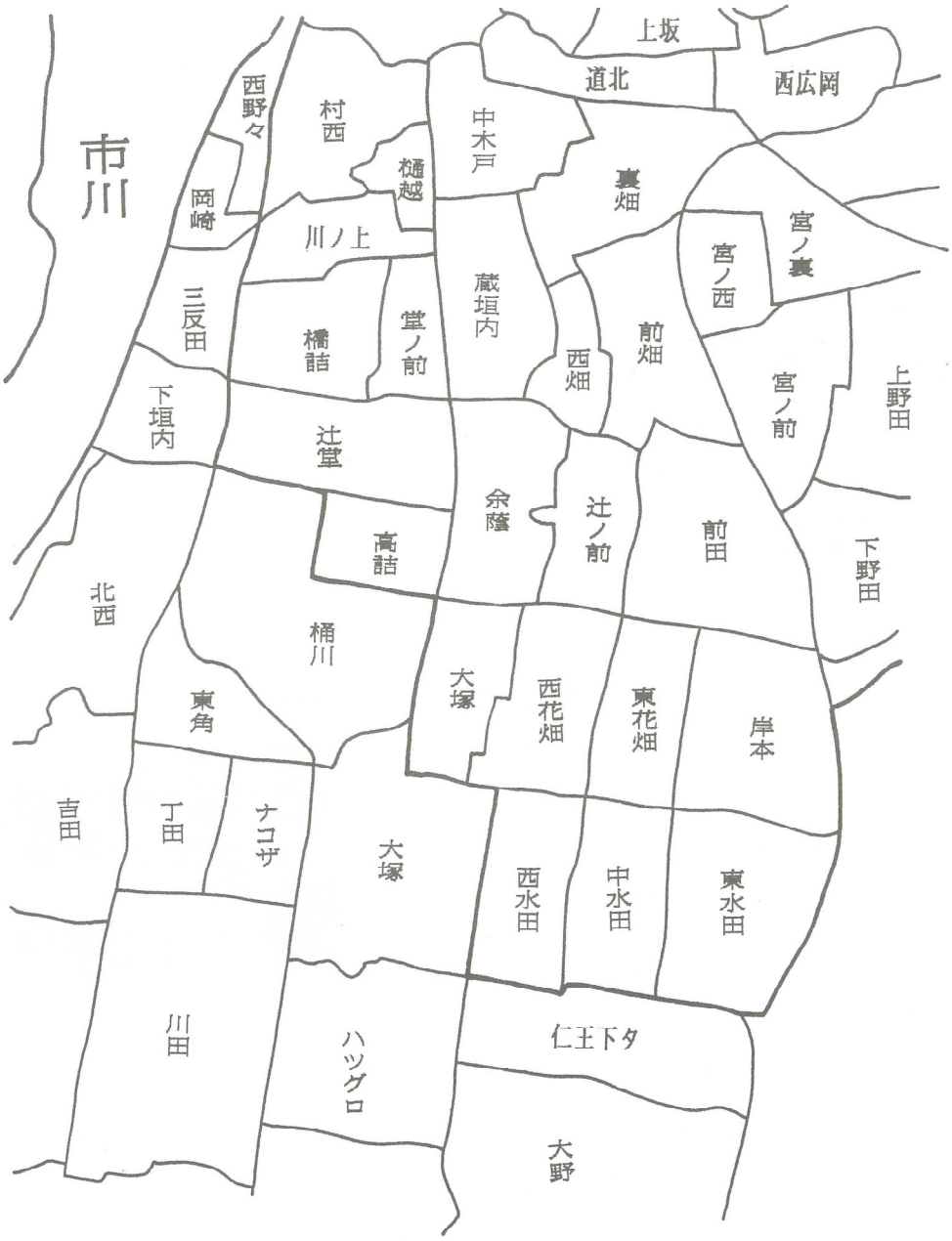
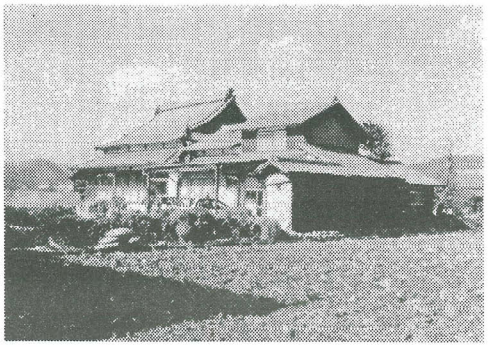


図5　小字図

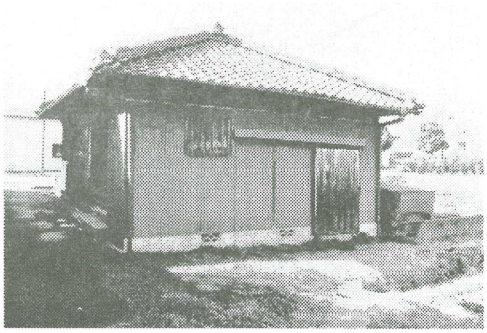
第４節　安徳寺と桶川の泉



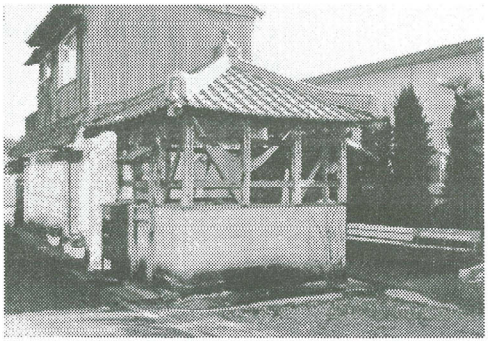
写７　安徳寺

南田原吉田地区に所在する安徳寺は今回の調査地点の西方50mの場所に位置する（写７）。曹洞宗の寺院で山号を浄水山という。『神崎郡誌』によれば「貞享二年(1685)に仏光の開基した寺院であり本尊の木造聖観音坐像は像高84cmをはかる寄木造の漆箔の美しい像で背面に元禄十六年(1703)六月　施主　浄清の墨書銘をもつものである。」と記している。[16] 柳田國男も「北国紀行」の中で安徳寺のことについて「明治四十二年(1909)の７月４日に兄の井上通泰の養家、吉田地区の井上家に立ち寄り、酒好きの尼のいた安徳庵が瓦葺きの寺院に建て替えられつつあったこと」を日記に記している。[17]

この寺院の江戸から明治にかけての様子が少しばかりわかるが、これだけをみれば江戸初期に創建された寺院ということが考えられるが、この「安徳寺」という名は古くは正応四年八月(1291)の「田原荘実検注進状」[18] の中にみえる里寺十三ケ寺の中にその名がみえ、現在知られている寺院の中でも有井寺（現辻川区有井堂（写８））勅使寺（現八反田区廃寺）の名もみられる。この安徳寺は現吉田区に所在する寺院と考えられることから、当寺の創建は正応四年以前と考えられる。当寺の寺域を考えるのに周辺の字名を参考にすれば安徳寺の北側には辻堂、堂ノ前の字が見られる。堂ノ前とあることからこの地の北側にこの字に対応する堂の存在が考えられる。[19] 辻堂は先の堂と安徳寺との間に位置することから名付けられたと考えられる。この堂という名の付く字名から安徳寺もそう規模の大きくない寺院であった可能性を示しているのではなかろうか。現在見られる里寺十三ケ寺の寺院をみても有井堂、勅使寺等も規模は大きくなく、柳田國男も記しているような庵であったような規模はそう大きくない寺院であったと考えられる。ただ字桶川に当寺に関連する井戸「桶川の泉」がみられることから関連するものが東に存在していた可能性を残す。（写９）この桶川の泉には、次のような言い伝えがある。



写８　有井堂



写９　桶川の泉

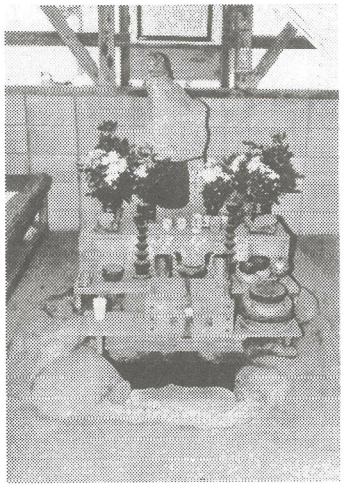
「これは日本三大桶川の泉といわれ安徳天皇三才の時、この水によって眼病を治癒されたと伝えられている。」[20] これに関して日本三大桶川の泉ということで、ここの他にあと２箇所あることになるが、小林弘が安徳寺住職より聞き取りとして記しているものをみると、他の２箇所は四国の屋島と岐阜県内に存在し同じ安徳寺という名をもつ寺院にみられるということである。[21] 全国寺院名鑑[22] によると安徳寺という寺は５寺存在し確認をとったがいずれも存在しな

かった。また屋島には安徳寺は存在せず屋島寺のみみられるがそこにも存在しなかった。岐阜県下においては安徳寺の名はみえずその存在を確認することはできなかった。

これは、安徳寺の規模が大きくなく有井堂の様に堂程度のものとして存在し、そこに桶川の泉が存在している場合わからないと思われるが桶川の泉の存在は今後の課題としたい。

写10　金銅仏

この泉の中を昭和20年代に底さらえを行い、その際に金銅仏がでてきたといい、現在安徳寺でまつられている。[16] 観音様としてまつられていたが像容からすると地蔵菩薩の可能性が高く、像容や技法を考慮すると江戸時代のものと考えられる。[18] (写10) 底には桶状のものが埋め込まれ、桶川の名の元になったのではないかと考えられているが[19]、最下層をさらえると破損の恐れもあるということで、桶の上端部分でさらえ終わったということである。そのために他の遺物は良くわからない状況にあり、桶川の年代についても上限を具体的に示す資料は残念ながら得ていない。


写11　桶川の泉

桶川に湧く清水について千葉徳爾は柳田國男が霊水の湧く地には不思議な幼童が出現した伝説があり、その幼童を育てる姥が侍っているという信仰がともなっていたことを述べていることを紹介し、安徳寺がもと庵寺で、老尼がそれを守り傍らに霊水が湧いていたとすれば、安徳天皇と二位の尼のひそかに世を隠れ忍んだという推測が伝説としてそこに根付いたとしても不思議でないとしている。[19]

その様な中から根付いた信仰心は石仏の造立[17]や小堂の造立によっても現れており現在も地蔵盆にはここでも行事がとりおこなわれている。泉の水は今も涸れる事なく湧き出ているが、周辺の都市化により近年の水質は悪くなっていると聞く、しかし、泉の水が湧く限り信仰心は脈々と受け継がれて行くことであろう。(写11)

(16)　神崎郡教育会『神崎郡誌』1942年　神崎郡教育会

(17)　柳田國男「北国紀行」『定本　柳田國男集』第３巻　1963年７月　筑摩書房

(18)　中野栄夫「二　中世前期の福崎　４中世社会の構造と播磨」『福崎町史』第一巻本文編Ⅰ　1994年３月　福崎町

(19)　千葉徳爾「一　福崎地域の民俗事象と全国的位置付け　５土地の名、人の名、家の名、その意義」『福崎町史』第一巻本文編Ⅰ　1994年３月　福崎町　の中で前とは南を差すように方角についての感覚を示しているように思われるとしている。そのことからすると「堂ノ前」は堂の南といえその北側に堂の存在が考えら

れるのではなかろうか。

⑳　島田清ほか『福崎町の文化財』第１集　1975年３月　福崎町教育委員会

㉑　小林弘「吉田」『かたりべ＝福崎町小字名調査特集その1＝』第16集　1997年11月　福崎町かたりべ会

㉒　『全国寺院名鑑』1969年３月　全日本仏教会

㉓　昭和39年に安達秀太郎の寄付により修理が行われており、像容が若干不鮮明となっている。

㉔　神戸佳文氏に教示を得た。

㉕　安徳寺住職　高橋晦明氏に教示を得た。

㉖　千葉徳爾「一　福崎地域の民俗事象と全国的位置付け　７信仰とその表現」『福崎町史』第一巻本文編Ⅰ　1994年3月　福崎町

㉗　現在、桶川の泉には明治43年4月 (1910) に世話人、内藤森蔵によって造立された薬師如来の石仏があり、町内では明治といえども唯一の石造薬師如来である。

増田重信ほか『石造遺品』福崎町の文化財第３集　1993年３月　福崎町教育委員会

第２章　確認調査

第１節　調査の方法

現況は水田となっており一見して平坦面を呈する状況にある。ここに銀ビルストアーが建設されるために、周辺の状況を確認する意味からいっても全面的な状況把握を試みた。そのために、田としての区画1筆ごとにつき最低1か所の割合で調査区を設定した。田の面積が大きいものに関しては２か所程度の調査区を設け合計14ケ所の調査区を設けた。(図６) 調査区には順に番号を付し、土層状況観察と遺物採集を試みた。調査区の掘削は耕作土および埋土に関しては重機を用い、壁面と底面は人力精査を行った。遺構は人力により掘削を行った。その後、写真撮影と図面作成を行い最終的には耕作土と埋土が混じらないように埋め戻しを実施した。

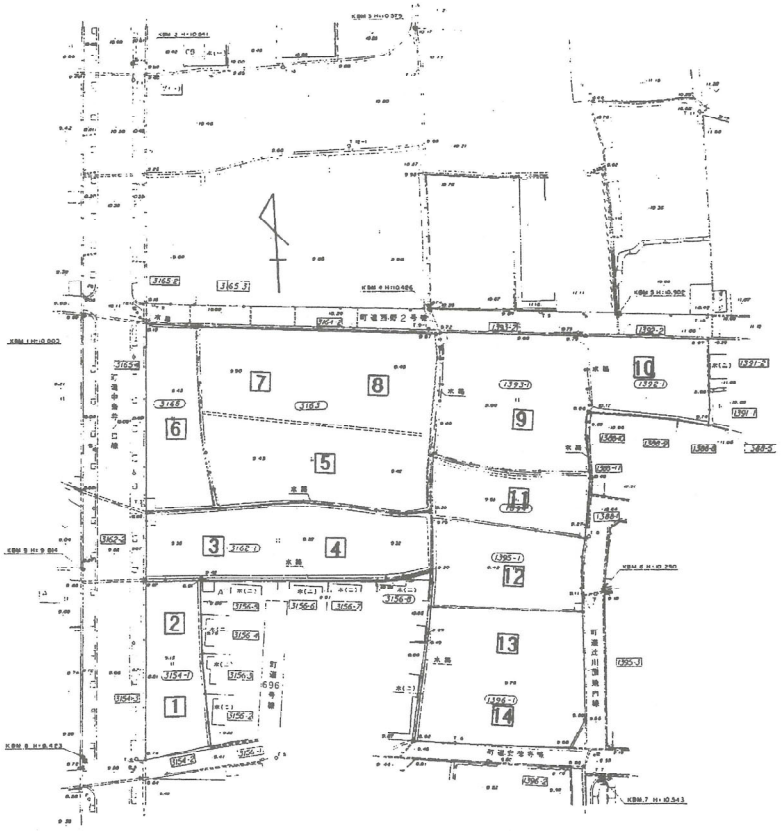


図６　調査区位置図（確認調査）

第２節　確認調査概要

地形分類上、高位氾濫原に位置する場所であり、過去市川の氾濫原として存在していたことがうかがえ、さらに雲津川の氾濫原としての想定もできた。そのため、遺跡の存在は希薄なものと考えられたが、周辺に安徳寺、桶川の泉が存在し遺跡の有無を確認する意味での調査であった。調査は番号の大きなものから順に行い、結果的に遺跡の存在を確認した。

以下調査区の概要を示す。

基本層序は耕作土、床土、堆積土、堆積粘土(氾濫原に該当)となり、微高地部分に該当する場所は黄色系土層の堆積が認められる。(図7)

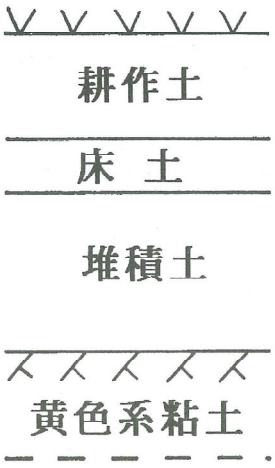


図7　基本層序

1　**調査区**(図8、9)

調査区1(図8)

層序は耕作土、床土があり、以下を粘質土、粘土が堆積する。下層の粘土は他の調査区で見られる様な堆積と色調が違うために氾濫原に伴うような堆積と考えにくい。また、遺物を含むことからも他の調査区の堆積と様相が異なる。床土以下の土層からは比較的まとまりのある遺物の出土が見られ、遺物包含層としての認識がもてる。

調査区2(図8)

層序は耕作土がありその下には通常床土が堆積するがここは不明瞭であった。耕作土直下には暗灰茶色土があり遺物が認められた。地山は淡黄褐色土を呈し、そこに暗茶褐色土を呈する溝状遺構が見られる。溝状遺構は深さ約40cm幅約50cmあり北面から西面に曲がる形が認められる。ただ、明瞭な形での検出でなかったために確実な遺構とするには不確定な要素をもつ。

調査区3(図9)

層序は耕作土、床土があり、以下を粘質土が堆積しその下層の淡茶灰色土からは暗灰色土を呈するｐｉｔが見られた。粘質土は床土と同様の性格と考えられる。ｐｉｔ内埋土の色調と質感から考慮すると上層からの掘り込みと考えられ比較的新しい時期のものと考えられる。ｐｉｔ内からの土器類の遺物の出土は見られず、石を1点含むのみであった。また、調査区からの遺物の出土も見られなかった。

調査区4(図8)

層序は耕作土、床土があり、以下を暗灰褐色土、淡茶灰色土がみられる。層序は調査区5と同様と考えられ以下を暗茶褐色土、暗灰茶色粘土と続き氾濫原の一部と考えられる。

調査区5(図8)

層序は調査区4と同様である。

調査区6(図8)

層序は耕作土、床土があり、以下を暗灰茶色土と砂層堆積が見られる。砂層は氾濫原の堆積

と考えられる。

調査区7 (図8)

層序は耕作土、床土があり、以下を灰色系統の土層堆積が見られ、地山は明黄灰色土で微高地部分と考えられる。床土直下の暗黄灰色土も床土と同様の堆積と考えられる。中からは遺物の出土が見られるが2次的な包含と考えられる。

調査区8 (図8)

層序は耕作土、床土があり、以下を暗黄灰色土、淡黒灰色土、淡茶灰色土と続き、最下層は粘土が見られる。粘土は氾濫原の堆積と考えられる。調査区7と同様に暗黄灰色土中からは遺物の出土が見られる。

調査区9 (図9)

層序は耕作土、床土と考えられる堆積が見られ、以下を遺物を含む暗茶褐色土、粘土と続く。粘土は氾濫原に見られる堆積と考えられる。

調査区10 (図9)

層序は耕作土、床土があり、以下を暗黒灰色土層と砂層が見られる。砂層は氾濫原と考えられる部分にひろがり基本的な面を構成する。

調査区11 (図9)

層序は耕作土、床土があり、以下を遺物を含む暗黒灰色土層、氾濫原を示すと考えられる砂礫層と続く。砂礫層は直径3～15cmの礫が見られる。ここからは、淡灰色粗砂層に粘土質の溝状遺構が北西から南東方向に走るのが見られ自然流路と考えられる。

調査区12 (図9)

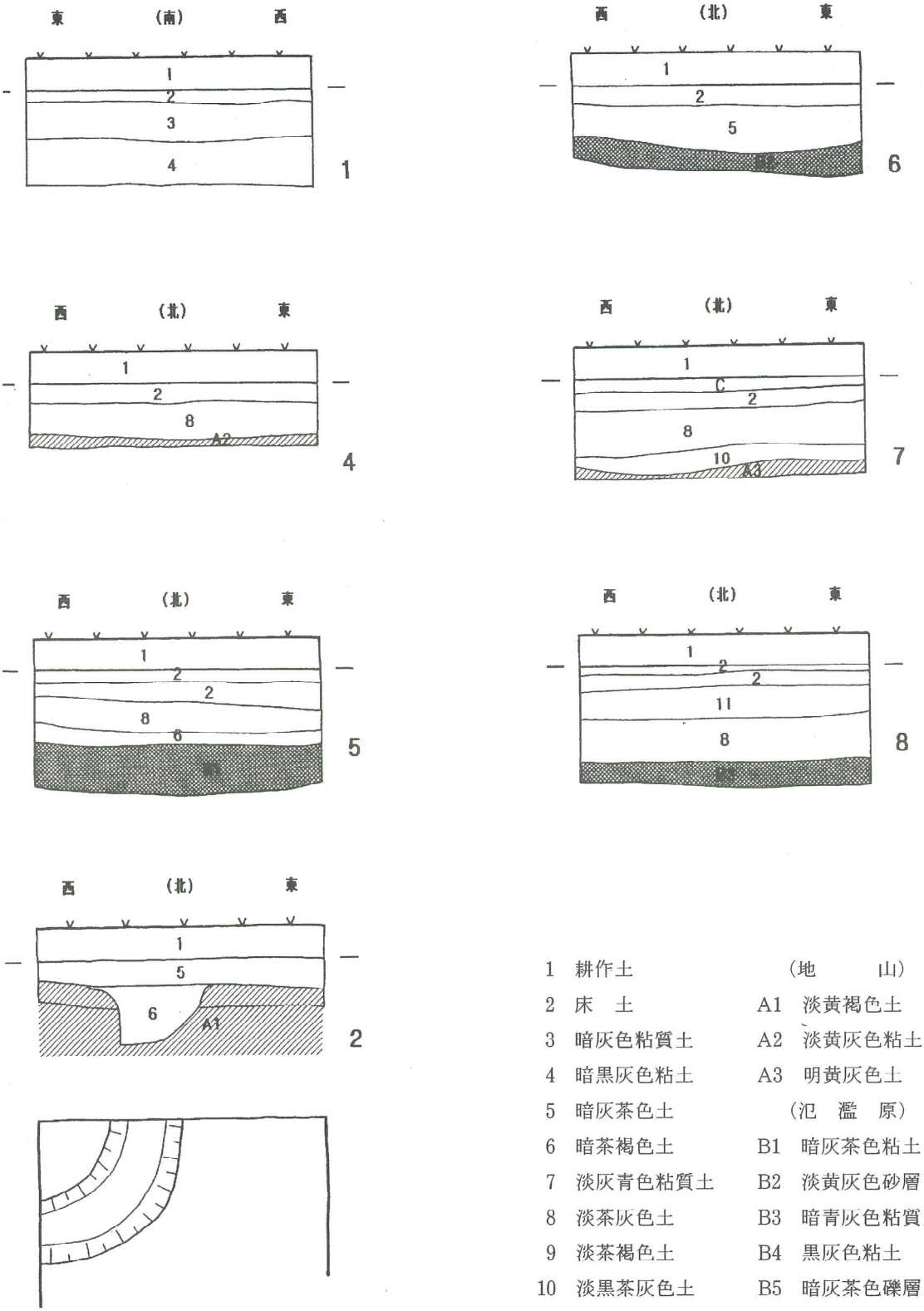
層序は耕作土、床土(真土)があり、以下を粘土層及び調査区11で見られた砂礫層が堆積する。

調査区13 (図9)

層序は調査区12と同様である。土層堆積は調査区12よりも比較的厚く堆積する。

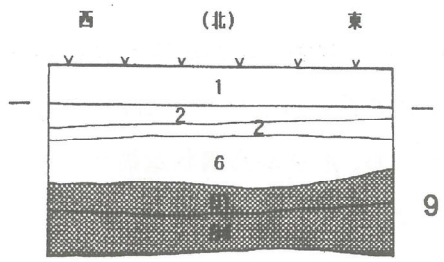
調査区14 (図9)

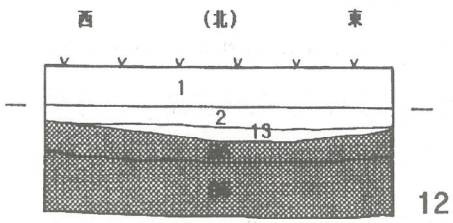
層序は耕作土、床土(真土)があり、以下を粘土層およびシルト層が堆積する。調査区13と同様に氾濫原の一角を示す土層堆積と考えられる。遺物は見られなかった。

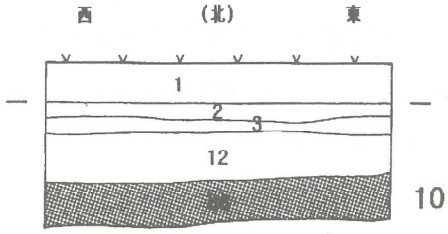


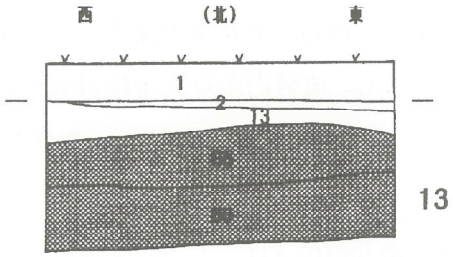
1	耕作土		(地　　山)
2	床　土	A1	淡黄褐色土
3	暗灰色粘質土	A2	淡黄灰色粘土
4	暗黒灰色粘土	A3	明黄灰色土
5	暗灰茶色土		(氾　濫　原)
6	暗茶褐色土	B1	暗灰茶色粘土
7	淡灰青色粘質土	B2	淡黄灰色砂層
8	淡茶灰色土	B3	暗青灰色粘質土
9	淡茶褐色土	B4	黒灰色粘土
10	淡黒茶灰色土	B5	暗灰茶色礫層
11	淡黒灰色土	B6	淡灰色粗砂層
12	暗黒灰色土	B7	淡緑灰色シルト
13	暗青灰色土		(旧　耕　土)
14	淡青灰色土	C	暗灰色土
15	暗黒色粘土		

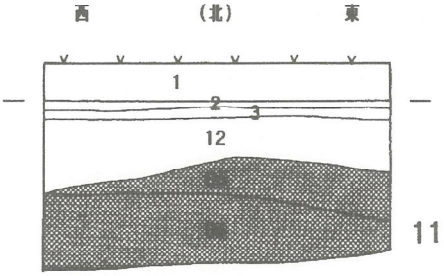
図8　土層図

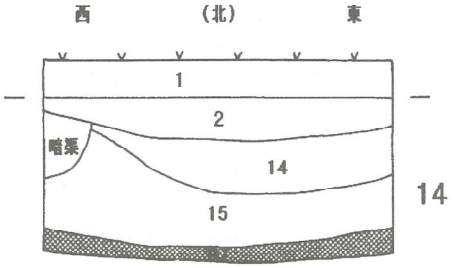


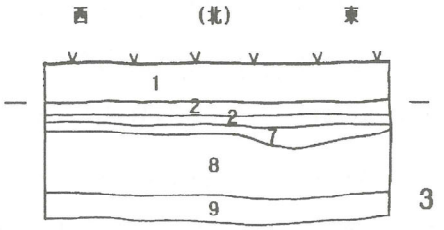


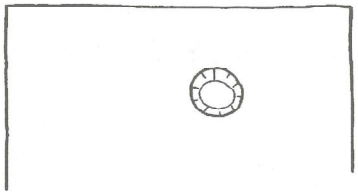












1　耕作土
2　床　土
3　暗灰色粘質土
4　暗黒灰色粘土
5　暗灰茶色土
6　暗茶褐色土
7　淡灰青色粘質土
8　淡茶灰色土
9　淡茶褐色土
10　淡黒茶灰色土
11　淡黒灰色土
12　暗黒灰色土
13　暗青灰色土
14　淡青灰色土
15　暗黒色粘土

（地　　山）
A1　淡黄褐色土
A2　淡黄灰色粘土
A3　明黄灰色土
（氾　濫　原）
B1　暗灰茶色粘土
B2　淡黄灰色砂層
B3　暗青灰色粘質土
B4　黒灰色粘土
B5　暗灰茶色礫層
B6　淡灰色粗砂層
B7　淡緑灰色シルト
（旧　耕　土）
C　暗灰色土

図9　土層図

2　遺　構 (図8、9)

調査区2より溝状遺構が検出された (図8)。埋土は暗茶褐色土で遺構面からの深さは約40cm幅約50cmをはかる。形は北面から西面に向かって曲がる形で認められる。ただ、明瞭な形での検出でなかったために確実な遺構とするには不確定な要素をもち、形状から溝状遺構としたが遺構の性格は調査範囲の制約からして不明瞭といわざるを得ない。

調査区3よりｐｉｔが1個検出された (図9)。埋土は暗灰色土で深さは約70cmある。遺構内埋土の状況や周辺の状況を考慮すると上層からの掘り込みで比較的新しい時期のものと考えられる。しかし、遺構内から土器類の遺物の出土は認められなかったことから時期は特定できなかった。1点のみ石を含んでいたが性格を特定し得るものではなかった。

3　遺　物 (図10、11)

調査区1 (図10、11)

ここからは須恵器類、土師器類、瓦質土器類、磁器類の出土がみられた。

土師器類は皿類が中心で他に鍋類、羽釜類、その他がある。皿類の内、図10－1～7の7点が図化できた。

1は器高1.5cm口径8.5cmをはかり外面は成形時の圧痕がみられ、口縁端部はナデによるつまみ上げがみられる。色調は内面暗茶色、外面淡茶色を呈し胎土は密で焼成は良好である。2は器高1.2cm口径7.6cmをはかり口縁部は横ナデが、端部はつまみ上げがみられ、底部外面は成形時の圧痕が残る。色調は内面暗茶色、外面白茶色を呈し胎土は密で焼成は良好である。3　は器高1.0cm口径7.4cmをはかり内外面にナデ調整がみられる。端部は丸くおさまる。色調は内面桃色、外面白茶色を呈し胎土は密で赤褐色砂粒が極少量混じる。焼成は良好である。4は器高1.5cm口径7.2cmをはかり口縁部は強いナデにより面を持つ。底部から口縁部にかけてはやや強めのナデを施し底部は圧痕がみられる。色調は内面明白茶色、外面暗白茶色を呈し胎土は密で焼成は良好である。5は器高2.3cm口径13.4cmをはかり、体部内面及び口縁部にナデが施され、体部外面は圧痕がみられる。色調は内面淡黒茶色、外面黒茶色を呈し胎土は密で焼成は良好である。内外面共に炭素と考えられるものが認められる。6は器高2.7cm口径14.0cmをはかり、底部から口縁部にかけては2段のナデが施され、口縁部は丸くおさまる。色調は内外面淡白茶色を呈し胎土は密で焼成は良好である。7は器高1.7cm口径15.4cmをはかり、体部及び口縁部にナデが施され、口縁端部はつまみ上げがみられる。色調は内面白茶色、外面淡茶色を呈し胎土は密で赤褐色砂粒が極少量混じる。焼成は良好である。

15は土師器の鍋と考えられ口縁部の残りも悪いが復元径を求めるならば口径30.4cmをはかり口縁部は横ナデがみられ端部強いナデにより面が認められる。頸部から体部にかけては平行タタキの跡がみられる。色調は淡茶白色を呈し胎土は密で1～3mm大の砂粒を含む。焼成は良好

である。その他の鍋類と考えられるものは5点あるが色調は暗茶色系と暗灰色系に分けられる。胎土はそれぞれ密であり白色砂粒を含む点も共通する。焼成は須恵器的に堅く焼きしまっており、外面にはタタキ痕が明瞭に残るものもある。

須恵器類は杯16点(口縁部7・底部4・その他5)、甕2点、壺1点、こね鉢(片口)2点、その他の細片6点の27点が出土している。

壺は口縁部が残っており小壺と考えられる。色調は暗青灰色を呈し胎土は密で1㎝程度の小石を1点含む。焼成は良好である。13は甕で色調は内外面は暗灰色を呈し胎土は密である。焼成はやや良といえる。外面にはタタキ痕が残るが一部粘土状のものが付着しておりその部分のタタキ痕は不明瞭である。もう1点の色調は内外面共に暗青灰色を呈し程度は密で焼成は堅緻である。外面には平行タタキが認められる。こね鉢の破片は一部分のため全体は明かでないが、色調は暗青灰色を呈し胎土はやや密で焼成は良好である。表面的にはザラつき感が残る。もう1点も同様であるが表面のザラつき感は弱い。

杯類は底部と口縁部とその他(体部)に分けられる。9～11の底部はいずれも糸切り痕が残り色調は内外面とも暗灰色を呈し胎土は密で焼成は良好である。9の色調は暗青灰色を呈し胎土は密で焼成も良好である。10、11に比べると堅く焼きしまっている。口縁部はいずれも重ね焼きの痕跡が認められ端部の色調は黒灰色を呈する。全体の色調は暗灰色を基本とし薄い色のものもある。胎土は密で焼成は堅緻である。底部片11と同様のものが多い。体部も底部片11と同様のものが多い。同一個体の可能性が高いが接合までには至らない。

白磁は2点出土し、図11－17は口縁端部が玉縁状を呈する椀と考えられ、横田・森田編年Ⅳ類に該当するものと考えられる。[28] もう1点は体部と考えられる細片である。

その他のものとしては図化できなかったが弥生土器と考えられるものの出土もみられる。

調査区2(図10)

上から2層目の暗灰茶色土より出土した。須恵器類と土師器類が出土し、須恵器類が6個体、土師器類が9個体分と考えられる。

須恵器類はすべて杯類と考えられる。口縁部は2点みられ口縁端部は共に黒灰色を呈する。色調は暗灰色と暗青灰色のものがあり、胎土は密で白色砂粒を含むものや白色及び褐色砂粒を含むものがある。焼成はやや良好と堅緻といえるものがある。4点は底部で12の1点のみ図化した。3点の色調は暗灰色、淡灰色、暗青灰色を呈し、共に胎土は密で白色砂粒を含み、焼成は良好である。底部外面には糸切り痕がみえる。12の色調は黒灰色で焼成はやや不良で生焼けの様相を呈する、胎土は密で白色砂粒を含む。

土師器類は共に皿類と考えられ9点の内4点は細片のためにどの部分かも不明であるが、白茶系と赤茶系の個体に分けられる。その他のものについては、底部及び口縁部が残っているものであり共に胎土は密で焼成は良好といえる。これらも色調は白茶系と赤茶系に分けられる。

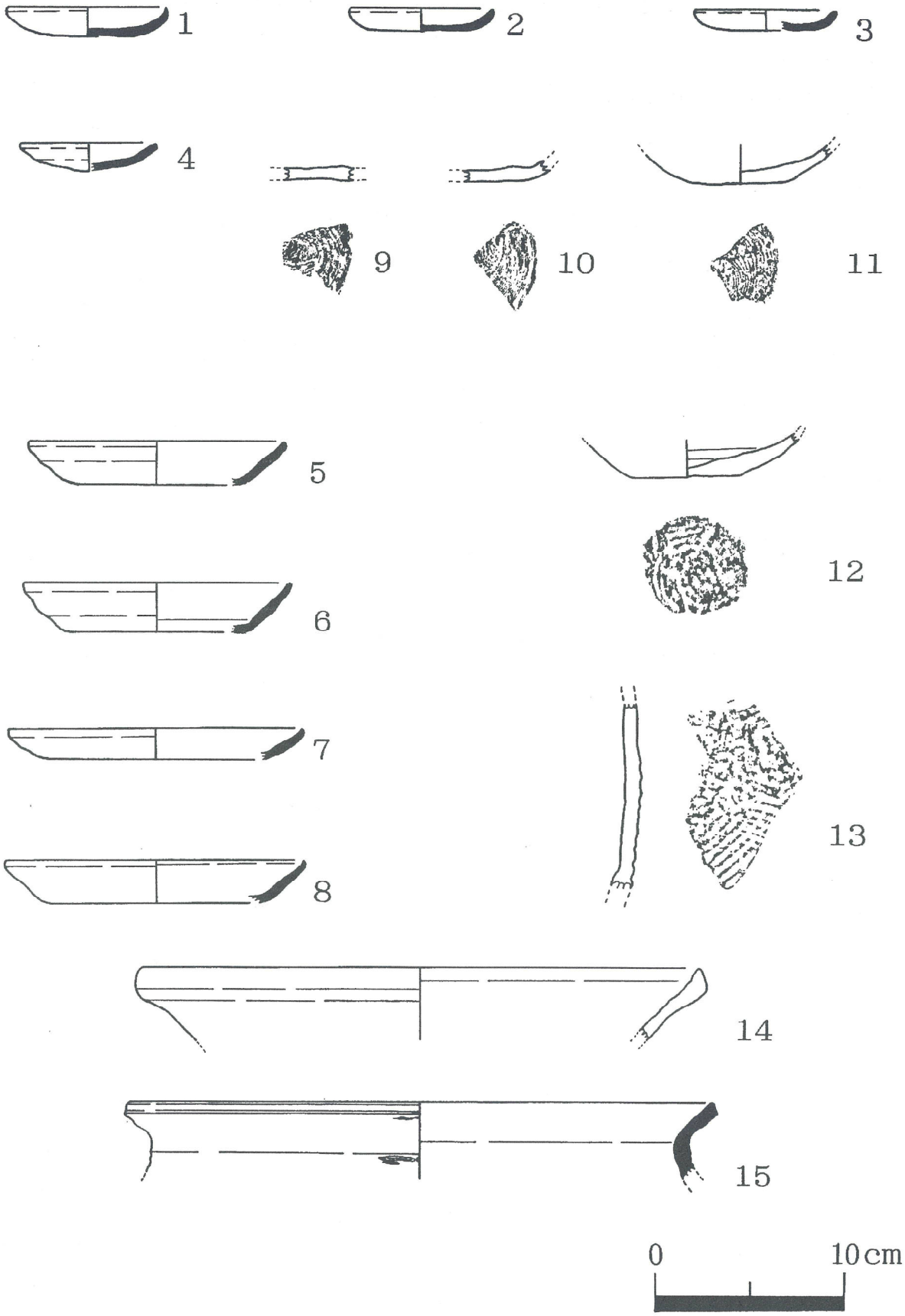


図10　確認調査出土遺物(1～7･9～11･13･15 調査区1、12 調査区2、14 調査区8、8 調査区13)

この内１点の胎土は精緻で他のものと比較しても細かいものである。これらはほとんどが小皿と考えられるが、１点は底径が大きい物が見られ須恵器の坏の底部に類似する。色調は底部外面赤褐色で内面は白茶色を呈し胎土は密で白色砂粒及び赤褐色砂粒を含み焼成はやや良好である。底部には糸切り痕はみられずヘラ切り痕といえるものがみられる。

調査区３

上から３層目の淡黄灰色粘質土から須恵器が1点出土した。器種は杯と考えられ、色調は暗青灰色を呈し口縁端部は黒灰色を呈し、胎土は精緻で焼成も良好である。残存率が悪く復元径を求められなかった。

調査区７

上から３層目の暗黄灰色土から須恵器の細片が２点出土した。細片のために明確ではないが杯類と考えられる。１点は色調は暗青灰色、胎土は精緻、焼成は良好である。他の１点は色調は淡青灰色、胎土は精緻で極細の白色砂粒を含み焼成は良好である。

調査区８ (図10)

上から３層目の暗黄灰色土から須恵質土器２点と土師器が１点出土した。こね鉢 (片口) 以外はいずれも破片であり復元することはできないが、器種は須恵質土器では杯類、土師器では皿類と言うことができる。

14はこね鉢 (片口) の破片でいわゆる東播系須恵器と考えられる。復元径29.0cmとなり、口縁部は玉縁状に丸くおさまる。色調は暗紫灰色を基本とし、口縁部は暗黒色を呈する。

重ね焼きの痕跡と考えられ、色調に差異が見られる部分には焼成時に重ね焼きを行なった際の接着痕が見られる。胎土はやや密で焼成は良好である。森田編年の第Ⅷ期２段階に相当するものと考えられる。[29] 杯と考えられるものは器形を復元するだけの法量は残っておらず、復元径は不明である。口縁部は丸くおさまる。色調は全体的に青灰色を呈しているが、口縁部分は暗青灰色を呈している。焼成時の重ね焼きの痕跡と考えられる。胎土は密で焼成は良好である。

土師器の皿類と考えられるものは、色調は赤褐色を呈し、胎土は密で、焼成は良好である。

調査区９

上から４層目の暗茶褐色土から須恵器の細片が１点出土した。細片のため明確でないが鉢類 (片口) と考えられる。色調は暗青灰色、胎土は密、焼成は良好である。

調査区11 (図11－16)

上から４層目の暗黒灰色土から１点ではあるが青磁が出土した。色調は暗緑灰色を呈し、胎

土は精緻で灰白色を呈する。焼成は良好である。内外面には施文が見られるが細片であるために明瞭でない。同安窯系青磁と考えられ岡田編年B類に該当する。[30]

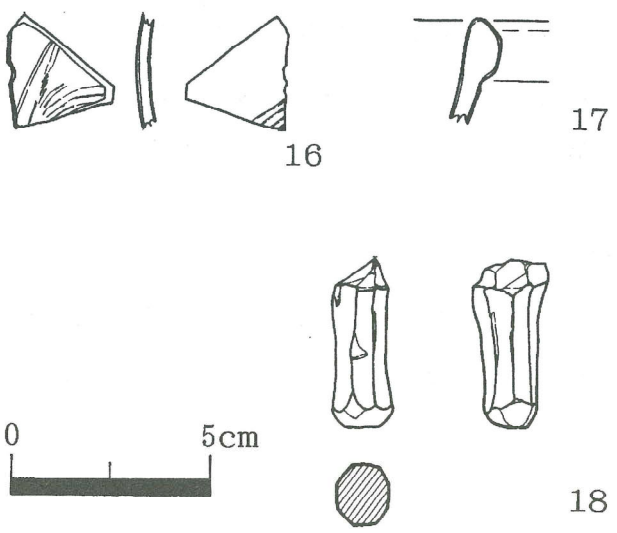


図11　確認調査出土遺物
（16 調査区11、17 調査区1、18 調査区12）

調査区12 (図11)

調査区12付近の耕作土中よりの表採品であるが、土師質土器1点と須恵器が1点採集された。

18は脚または取手と考えられる。残存高4.1㎝、色調は赤茶色を呈し、胎土は密で焼成も良好である。柱状部分は粗いが8つの平坦面をもつ。先端は同様の面をもちながら丸くおさまる。体部に接合していたと考えられる部分は斜めに剥離している状況が見られる。取手というよりも脚というほうが妥当と考えられる。須恵器の杯の口縁部の色調は暗青灰色で口縁端部は黒灰色を呈する。胎土は密で白色砂粒を含む。焼成は良好である。細片であるために復元径を求めることはできない。

調査区13 (図10)

調査区の土層は明確でないが、土師器の皿が1個体出土した。また、表採品ではあるが調査区13の周辺の耕作土中から須恵器が2点採取された。

8は土師器の皿である。器高2.2㎝、復元径15.7㎝を計る。色調は内面淡白茶色、外面淡茶色を呈し、胎土は密で茶褐色砂粒を含む。焼成はやや軟質ながらも良好である。口縁部は内傾し成形時につまみ上げる状況を呈する。調整は内外面とも磨耗が著しく不明瞭である。

底部は不定形な凹凸があり指押さえと考えられる。

須恵器で甕類と考えられる。色調は暗青灰色を呈し、胎土は蜜で白色砂粒を含む。焼成は良好である。成形時のたたき痕が外面にみられ内面はナデ調整を施し、たたきの痕跡は見られない。もう1点は須恵器の杯の底部と考えられる。色調は内外面淡白灰色を呈し、胎土は密で焼成は良好である。底部には糸切り痕が見られる。

(28)　横田賢次郎・森田勉「大宰府出土の輸入中国陶磁器について－型式分類と編年を中心として－」『九州歴史資料館研究論集』4　1978年3月　九州歴史資料館

(29)　森田稔「東播系中世須恵器生産の成立と展開－神出古窯址群を中心に－」『神戸市立博物館研究紀要』第3号

1986年3月　神戸市立博物館

(30)　岡田章一「兵庫県出土の青磁碗の形式分類と編年 (一)、(二)」『わたりやぐら』兵庫県立博物館研究ノート第21号、第22号1991年8月、1992年1月　兵庫県立歴史博物館

第3節　まとめ

確認調査においては自然河道及びその氾濫原と考えられる場所と微高地と考えられる場所が確認でき遺跡の範囲が絞り込まれた。今回の調査区内においては北側と東側で氾濫原に伴う土層が確認でき遺跡外ということができる。また、南西部分は微高地が確認でき遺構と遺物の出土がみられた。遺構は明確なものではなかったが近隣に所在する安徳寺や桶川の泉の存在からそれらに関連するものではないかと考えられる。

遺物は弥生土器的なものがみられることからも周辺に弥生遺跡の存在を示唆するものとして注目される。それ以外では土師器類や須恵器類等でも皿等の日常雑器的なものが中心となり、少量ではあるが輸入磁器もみられる。輸入磁器等は寺院関連の遺物としてとらえられるのであろうか。

時期的にも12世紀末～13世紀前半頃のものや15世紀代のものもみられ、鎌倉時代～室町時代のものと考えられる。安徳寺の名は正応四年 (1291) の田原荘実検注進状(31) の中にみえ、時期的にも安徳寺関連の可能性を持つものとしてとらえることができる。

(31)　中野栄夫「二　中世前期の福崎 4中世社会の構造と播磨」『福崎町史』第一巻本文編Ⅰ 1994年3月 福崎町

第３章　平成10年度南田原桶川遺跡発掘調査概要

第１節　調査に至る経過

平成９年度に確認調査を実施した結果、店舗建設範囲に遺跡が存在することが分かった。店舗建設計画による計画図面との比較の結果、遺跡の範囲には店舗等の基礎及び構造物は基本的には建設されないことが分かった。遺跡の範囲内は基本的に駐車場となり、工法も盛り土工法による建設ということで地下遺構には問題ないものと考えられた。しかし、南端部分には道路及び排水路が建設される計画があり、その部分は掘削を施す関係上、調査の対象地として関係者との協議を行った。設計変更等は基本的にはしないものとしたためにその部分のみを調査することとした。(図12)

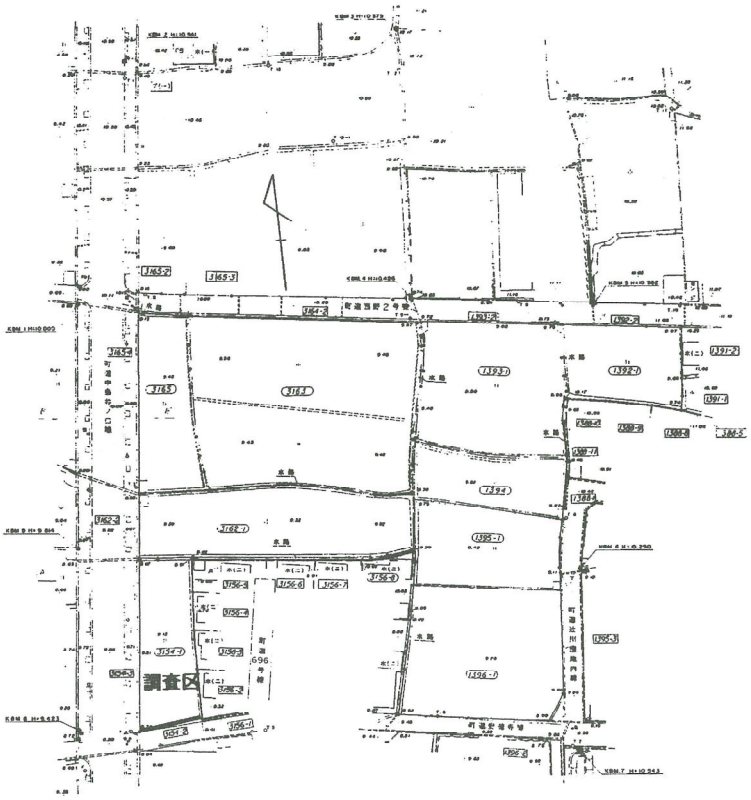


図12　調査区位置図（本調査）

第２節　調査概要

１　調査方法

調査区は店舗建設予定地の南西端部分に該当し道路及び排水路建設予定個所である。南北約２ｍ、東西約10ｍに渡り調査地区を設けた。調査は当初、土量等が少量ですむと判断し全て人力による掘削を試みた。しかし、期間や土量の関係上人力掘削には問題が生じることから、重機の導入を行い効率的に調査を実施した。耕作土及び床土に該当する部分は人力による掘削を

行い、以下の埋土は重機による掘削を行い遺構面まで掘り下げた。それ以降は人力精査を行い遺構掘削等は人力により行った。調査は図面と写真により記録を録ることにつとめ、調査終了後は調査地区の埋め戻しを行った。

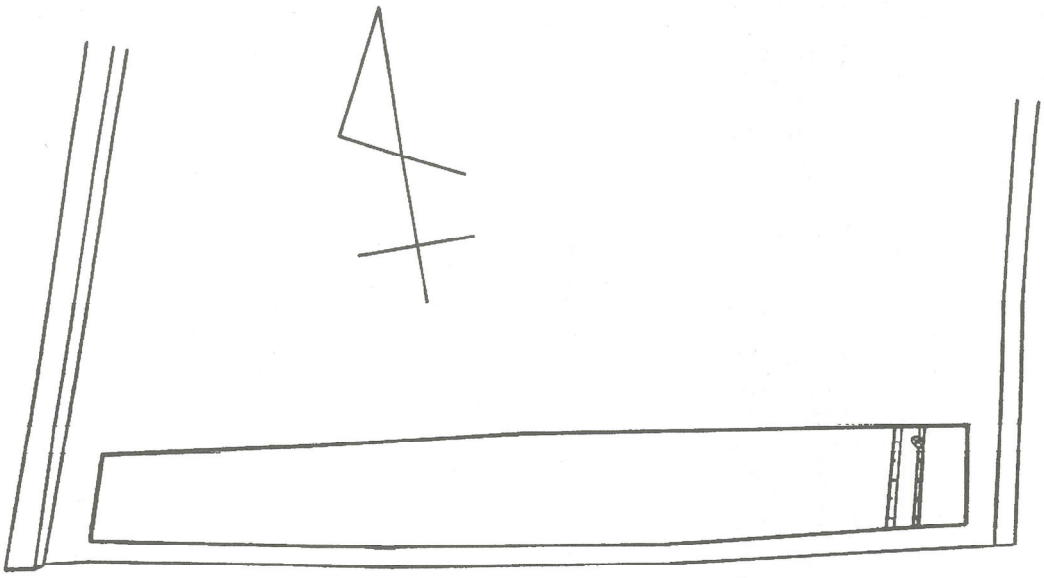


図13　調査区（上層遺構）

2　層　序 (図14)

この地区は確認調査の調査区１に該当する場所であり、層序も基本的にそれと同様である。しかし、確認調査時には、包含層がみられるのみと考えられ、遺構面は明確にできなかった。面的に広げた結果、遺構面が包含層の下に広がることが分かった。

最上層は耕作土で、その下に褐灰色砂質土が1層みられ、次に床土と考えられる黄褐色土がある。その下層には、旧耕作土と考えられる褐灰色土が見られるが、その下層には旧床土と考えられる土層は確認されなかった。その下層には黒褐色土がみられ遺物包含層を構成する。この下層の黄褐色粘土層が遺構面を形成する。そこに、ｐｉｔや溝状遺構が見られる。

確認時には床土以下に２層みられ、いずれも遺物を包含すると考えられたが、床土直下の層は今回の調査でも２層確認された。旧耕作土的な性格と考えられるものと、遺物包含層にわけられる。旧耕作土直下にはこれに関連すると考えられる暗渠が確認された。近世陶磁器 (図18－41) が混じることから、近世以降の耕作土と考えることができる。

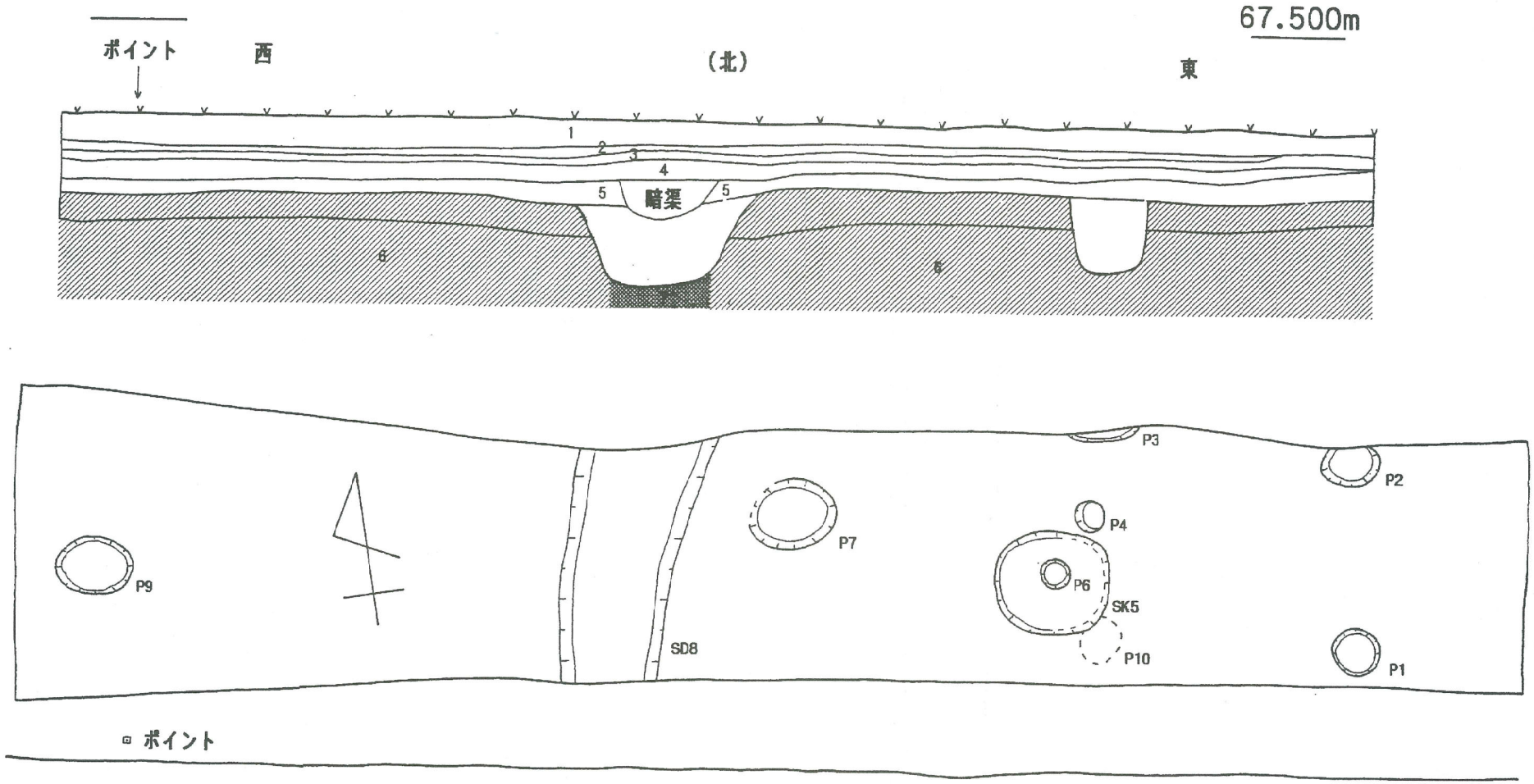


図14　遺構図・土層図

1　耕作土
2　褐灰色砂質土10YR5/1
3　(床土) 黄褐色土2.5YR5/4
4　(旧耕作土) 褐灰色土10YR5/1
5　黒褐色土10YR3/2
6　黄褐色粘土10YR5/6
7　暗緑灰色砂質土

遺物包含層は確認調査時にも認められた下層の遺物包含層がこれに該当すると考えられる。

3　遺　構 (図13、14)

東側には溝状遺構が南北方向に走るのが確認された。色調は灰色系統の土で旧耕作土に該当する部分の直下に当たることから暗渠的な性格が考えられる。しかし、旧耕作土が溝状遺構までに無くなることから、田の境を画する性格の溝ということも考えられる。比較的新しい時期のものと考えることができる。

遺構面にはｐｉｔおよび溝状遺構が認められ、ＳＤ８は南北方向に走る。このすぐ上層には暗渠が認められ、溝状遺構埋没後も水の流れがあり暗渠もその上に作られたのであろうか。ここを境としてみると西側にはｐｉｔ状のものが１基認められ、東側にはｐｉｔ群がまとまって見られる。Ｐ－1、2からは柱根が出土し、Ｐ－3からは木片の出土がみられた。Ｐ－1、2、3は建物に関するものと考えられる。

Ｐ－１ (図15)

長径35㎝、短径30㎝、残存の深さ17㎝をはかり楕円形を呈する。埋土は暗灰色土を呈しており、中から柱根が出土し、それ以外には土師器片の出土がみられた。柱根は重機による検出の際に倒れた形で出土しており、出土状況は適切でない。しかし、断面図では元の状況を復元している。

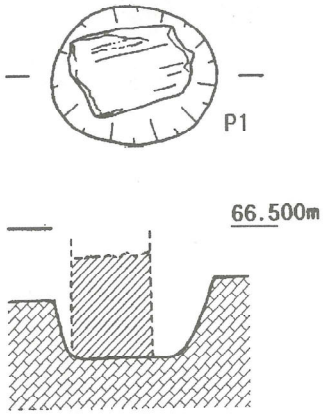


図15　遺構図Ｐ－１

Ｐ－２ (図16)

長径40㎝、短径約35㎝、残存の深さ20㎝をはかり楕円形を呈する。埋土は暗灰色土を呈しており、中から柱根が出土し、柱根付近は灰色粘土がみられ、これは、柱材が腐食し粘土化したものと考えられる。それ以外には須恵器片、土師器片の出土がみられた。

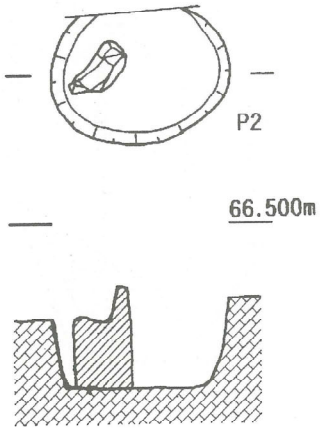


図16　遺構図Ｐ－２

Ｐ－３ (図14)

壁面であり全容は不明であるが、長径約40㎝をはかりＰ－1、2と同様の規模をもつものと考えられる。中からは木片と土師器片の出土が見られた。

これらは、一つの建物を構成すると考えられるが、Ｐ－10の位置にｐｉｔは確認できなかった。ＳＫ5により削平を受けているとも考えられることから、調査区の制約により明確ではないが少なくとも現状では１×１間以上の建物が想定できる。

ＳＤ８ (図14)

幅120㎝深さ約40㎝をはかり埋土は淡灰色茶色粘土であり、最下層からの遺物の出土は無かったが上の部分から出土遺物がある (図版14)。また、その周辺に包含層出土と考えられた遺物があるがＳＤ８出土のものと判断できるものが存在する。(図19－43～48) 溝の時期をこれら

に求めることができる。

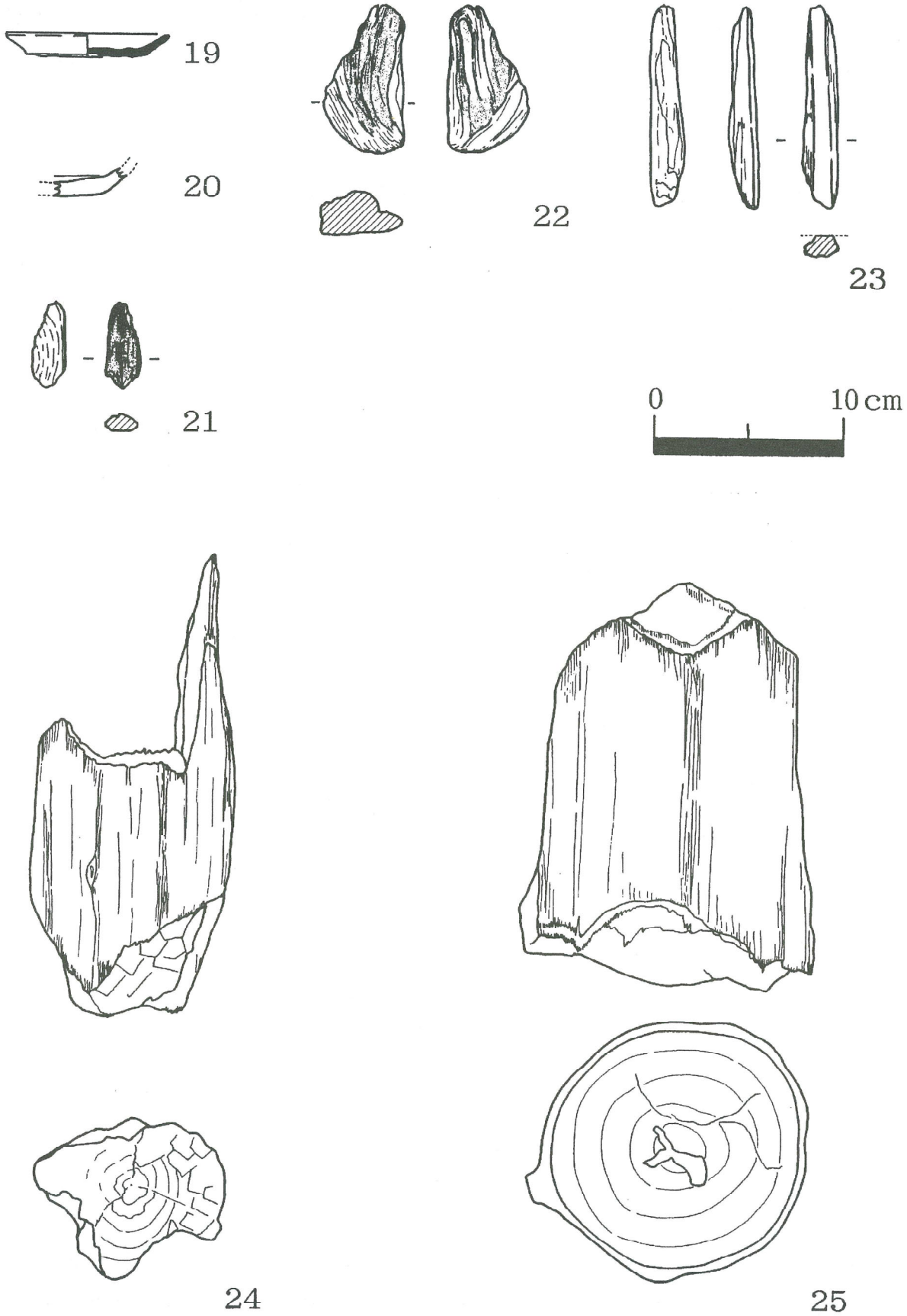


図17　遺構内出土遺物

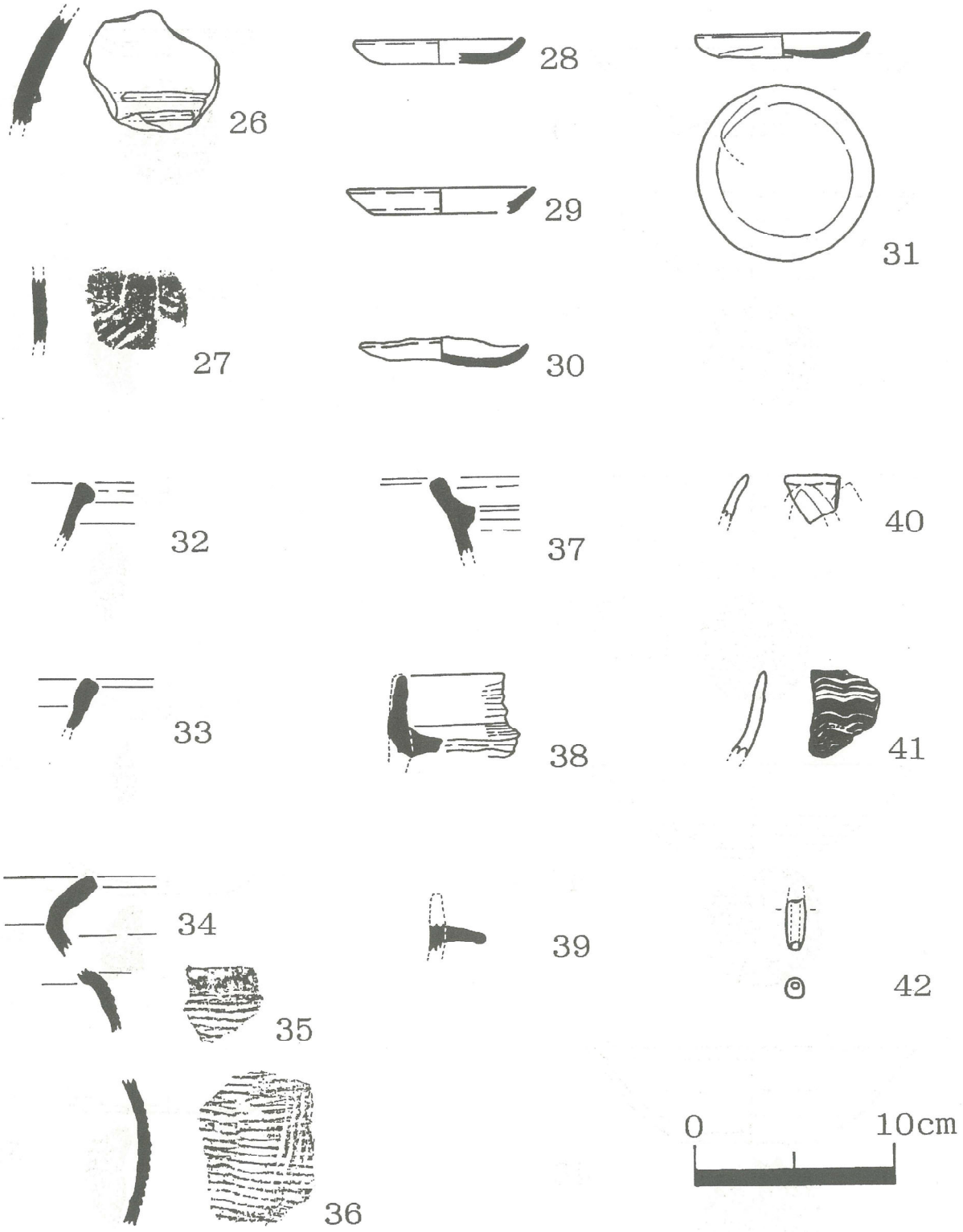


図18　包含層出土遺物

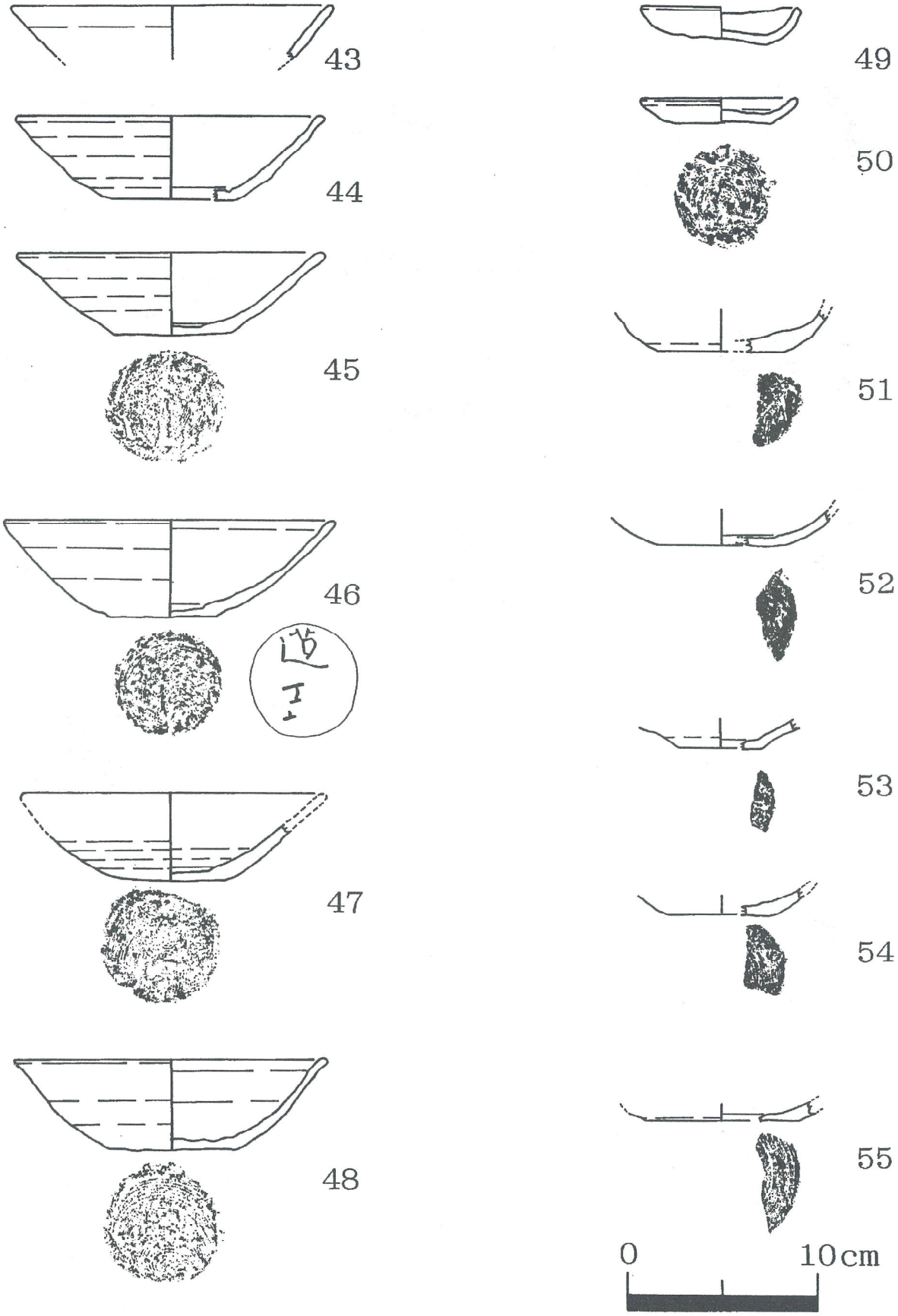


図19　包含層出土遺物

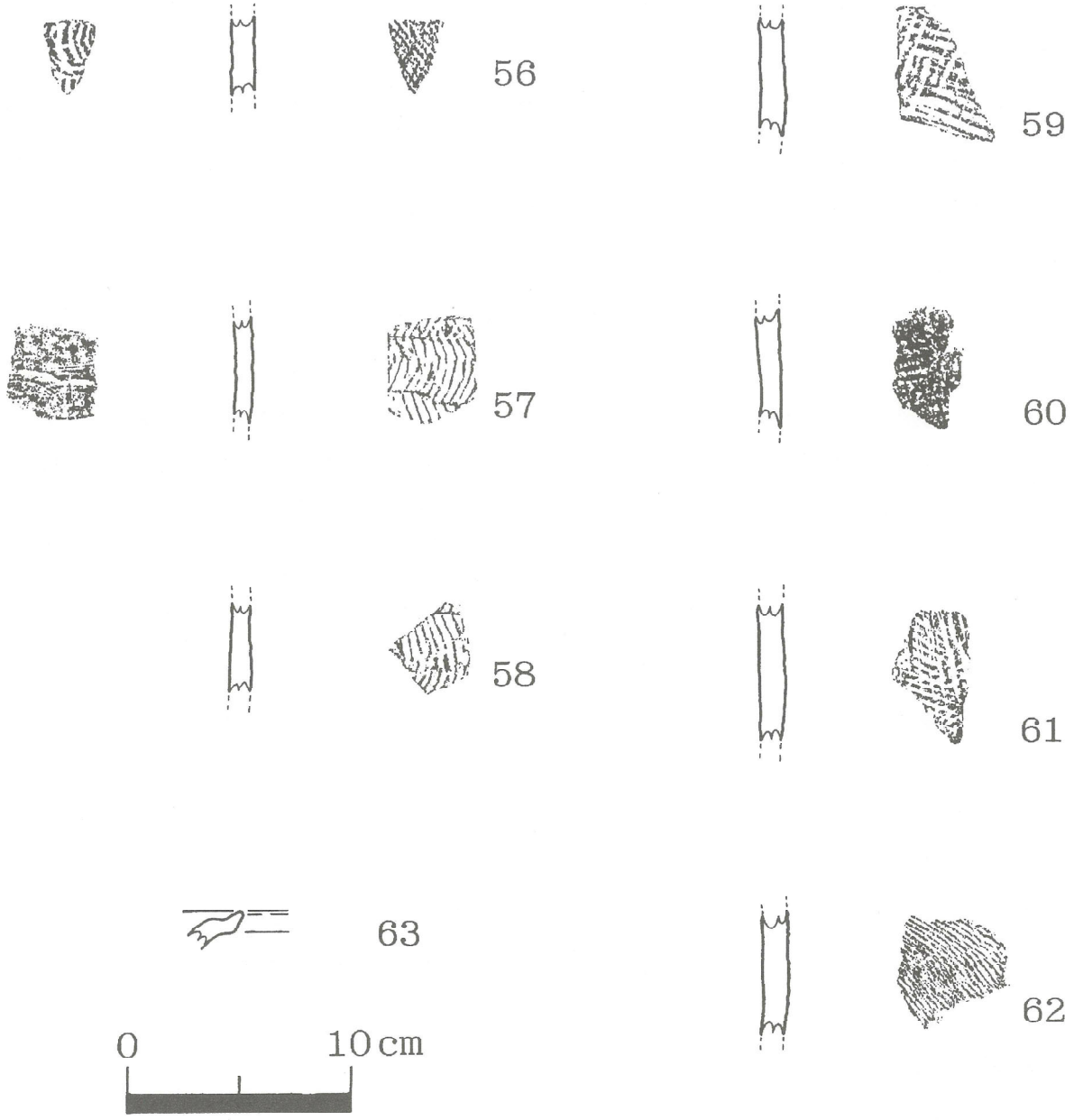


図20　包含層出土遺物

4　遺　物 (図17～22)

遺構内遺物と包含層内遺物の出土がみられ、土師器類、須恵器類、陶磁器類、石類、木類の出土がみられる。

P－1 (図17)

土師器が17点出土したが、図化可能のものは19の皿１点のみであった。他のものは細片であった。主に皿類と考えられるが１点は杯の可能性がある。これの外面には煤の付着がみられる。19は口径8.6cm器高1.2cmをはかり、色調は淡茶灰色を呈し胎土はやや密で焼成も良好であ

る。内面及び口縁部外面はナデが施され底部外面は指押えの痕跡がみられる。25は柱根で幅(直径)14.6cm残存長21.8cmをはかる。材質はヒノキである。

P－2 (図17)

土師器3点と須恵器1点が出土し、土師器は細片のため図化不可であったが皿1点と鍋2点である。20は須恵器の杯の底部で色調は暗灰色を呈し胎土は密で焼成は良好である。24は柱根では残存幅10.4cm残存長24.5cmをはかる。材質はヒノキである。

P－3 (図17)

土師器1点が出土したが細片のために図化不可であったが外面にタタキ跡があること等により鍋類と考えられる。外面には煤の付着がみられる。柱根の断片と考えられるものが22の1点みられ、この他に21、23の木片が2点みられる。21は残存値で最大厚0.8cm最大幅1.9cm最大長4.6cmをはかる。炭化状況が顕著で火を受けている。材質はマツ類である。22は残存値で最大厚2.2cm最大幅4.3cm最大長7.8cmをはかる。一部炭化状況が顕著な部分がある。材質はP－1、P－2のものと同様の感じでありヒノキと考えられる。23は残存値で最大厚1.1cm最大幅2.0cm最大長10.6cmをはかる。一面には削ったと考えられる加工面が存在する。これに関しては不明木製品である。材質はマツ類である。

包含層出土遺物 (図18～23)

包含層からは弥生土器、土師器類、須恵器類、陶磁器類、石器(石を含む)の出土がみられた。縄文土器的な胎土を持つ破片が1点見られるが細片のため明確でない。

弥生土器 (図18)

26の壺形土器と27の甕形土器の2点がみられ、26は頸部で貼り付け凸帯が2条みられる。中期に属するものと考えられる。27の甕は一部であるが外面に平行タタキを有し焼成や胎土の特徴から弥生土器とした。

土師器類 (図18)

皿類、鍋類、羽釜類の出土がみられる。

皿　類 (28～31)

28は器高1.2cm口径8.6cmをはかり胎土は密で色調は内外面赤茶色を呈し、焼成はやや良好である。29は器高1.2cm口径9.4cmをはかり胎土は密で色調は内外面淡白茶色を呈し、焼成は良好である。30は器高1.2cm口径8.5cmをはかり胎土は密で色調は内外面淡茶褐色を呈し、焼成は良好である。内外面にナデ調整を施す。31は器高1.2cm口径8.8cmをはかり胎土は密で色調は内面淡灰白色、外面淡茶白色を呈し、焼成はやや良好である。

底部には成形時の粘土痕がみられ、全面にナデ調整を施す。この土器にみられる粘土痕は、円盤状粘土の一端に切り込みを入れて成形した際にできる痕跡と類似していることからも、同様の成形技法が考えられる。(32)

鍋　類 (32～36)

口縁部と体部がみられ口縁部ではA・B・Cの3類に分けられる。細分も可能と考えられるがここでは出土遺物の量から細分は行わない。32はA類、34はB類、33はC類に該当する。32は口縁部が外に膨らむもので胎土は密、色調は内面淡橙色、外面淡白茶色を呈し焼成はやや良好である。34は口縁端部が面を持つものである。[63] これは陶質で胎土は密で1㎜大の砂粒を含み色調は内外面暗茶褐色を呈し焼成はやや良好である。33は内面が厚みを持つもので胎土は密で白色砂粒を多量に含み色調は内外面とも暗茶褐色で焼成はやや良好のものである。35、36は体部でともに平行タタキがみられる。35は土師質で胎土は密で色調は内外面淡白茶色を呈し焼成は良好である。36は硬質で胎土は密で2㎜大の砂粒を含み色調は内面淡黒灰色、外面は暗灰褐色をし焼成は良好である。図上は同じ所に並べたが同一個体ではない。

羽釜類 (37、38)

口縁部が2点みられA類、B類に分けられる。37はA類で鍔が比較的不明瞭なものである。胎土は密で1㎜大の砂粒を含み色調は内面淡橙色、外面淡白茶色を呈し焼成は良好である。38はB類で鍔が明瞭なもので胎土は密で1㎜大の砂粒を含み色調は内外面淡白茶色を呈し焼成は良好である。内外面には横ハケがみられる。

土　錘 (図18)

42は残存長で2.5㎝最大幅1.0㎝をはかる。穴の直径は約0.4㎝である。色調は淡灰色を呈する。

カマド (図21)

同一個体と考えられるものが2点存在し、64は胎土はやや密で白色砂粒等を多く含み、色調は外面暗茶色、内面暗茶褐色を呈し焼成もやや良好のものである。外面は指押さえが明瞭に残り、内面は粗いハケメが認められる。65も同様で外面には指ナデ及び指押さえの痕跡が認められ内面はハケメが若干認められる。カマドの鍔が付く部分であり鍔は凸帯状に付けられ、そこにも指押さえの痕跡が認められる。

65の個体の部位は全面向かって左側最下端部分と考えられ、最下端に突起状の突出部をもつ。後方部に同様の突出部を持つタイプや、そのままのタイプがあるが後者のタイプの可能性もある。[64]

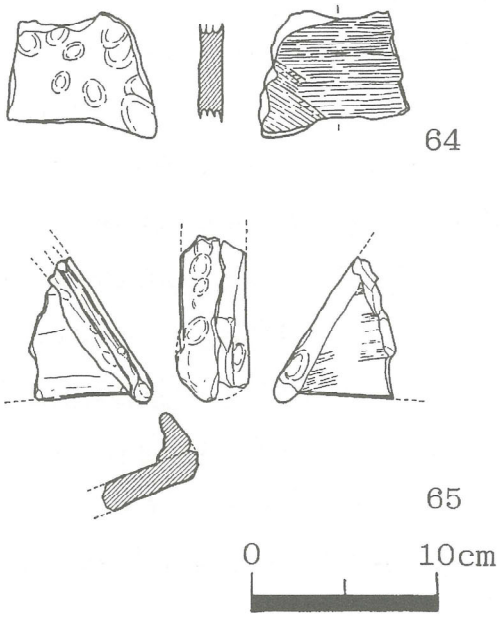


図21　包含層出土遺物(カマド)

須恵器類 (図19、20)

杯類と皿類と甕類がみられ、杯類 (図19－43～48、51～55) は図化可能のもので口縁部のみ43、底部のみ47、51～55、全容がわかるもの44～46、48があり、いずれも底部糸切り痕が認めら

れる。なお、断りのない限り胎土は密で焼成は良好のものである。

全容がわかるものではいずれも底部から口縁部にかけて直線的に立ち上がるものを主としている。43は口径17.0cm色調は内面暗灰色、外面白灰色を呈する。44は器高4.4cm口径16.2cm底径6.8cmをはかり色調は内外面暗灰色を呈する。45は器高4.3cm口径16.2cm底径6.0cmをはかり色調は内外面暗紫灰色を呈する。46は器高5.2cm口径17.3cm底径5.6cmをはかり胎土に3～5mm大の砂粒を少量含む。色調は内外面暗紫灰色を呈する。47は口縁部がないものの復元を試みた底径は6.2cmをはかる。胎土に白色砂粒を含み色調は暗紫灰色を呈する。底部には糸切り後、乾燥の際に台に置いた際に付いたと考えられる直線的な痕跡が残る。48は器高4.7cm口径16.4cm底径5.6cmをはかり色調は暗灰色を呈する。51は底径6.6cmで47と同様に底部に台に置いた痕跡がみられる。52は底径6.6cmで底部糸切り後にナデを施している。53は底径4.8cmで糸切り痕がみられる。54は底径5.6cmをはかる。55は底径8.0cmで5と同様に底部に台に置いた痕跡がみられる。

46の底部外面には墨書が認められ、2文字あることがわかった。上段の1文字目は「蓮」の可能性の指摘を受けた。下段のもう1文字は残念ながら判読不能である。

皿　類 (図19－49、50)

49は器高1.9cm口径8.4cmをはかり色調は外面暗黒灰色、内面淡灰色を呈しており焼成は良好と考えられるが瓦質的焼き上がりとなっている。50は器高1.3cm口径8.3cmをはかり色調は内外面暗青紫灰色を呈しており底部は糸切り痕がみられる。

甕　類 (図20)

いずれも細片であるが外面のタタキによって3種類に分けられる。A類は格子タタキがみられるもの。B類は綾杉状タタキがみられるもの。C類は平行タタキがみられるもの。これは粗いもの(1類)と細かいもの(2類)に分けられる。

A類は56、60があり、56の外面は細かな格子タタキがみられ、内面は同心円文がみられる。胎土は密で白色砂粒を含み色調は外面暗青灰色、内面暗灰色、胎土は暗紫色を呈する。60は外面格子タタキがみられ内面はナデが施される。外面には自然釉と考えられるものがあり格子タタキは不明瞭になっている。色調は釉調は暗緑色で内面は暗灰色を呈する。B類は57、58があり57の内面にはナデが施されるが同心円文がかすかに残る。色調は暗青灰色を呈する。58の内面はナデが施され同心円文はみられない。C1類の59は内面ナデを施し色調は内外面暗灰色を呈する。61は内面ナデを施す。C2類は62で胎土は密で白色砂粒を含み色調は内外面暗黒灰色を呈する。

壺　類 (図20)

63は壺の口縁部である。胎土は密で色調は内面暗青灰色、外面暗黒灰色を呈し焼成は良好である。

瓦質土器類 (図18)

羽　釜 (39)

39は瓦質で胎土は密で１㎜大の砂粒を含み、色調は外面黒灰色、内面暗灰色を呈し、焼成はやや良である。

陶磁器類 (図18)

40は青磁片で岡田編年ＣＩａ２類に該当するものと考えられる。[33] 胎土は密で色調は釉調が暗緑色、胎土は暗灰色を呈し焼成は良好である。龍泉窯系の青磁と考えられる。41は肥前系陶器に該当するものと考えられ、胎土は密で色調は釉調で暗茶褐色、胎土で暗紫色を呈し焼成は良好である。

石 (石器類) (図22・23)

66は横長剥片を素材としたサヌカイト製のナイフ型石器である。背面は底面のみで構成されるため、瀬戸内技法によるものかどうか判然としない。底面は２面で構成され、先端側の小さい面を基部側の大きなポジ面が切っている。このポジ面にはバルブが見られ、素材剥片が盤状剥片のファーストフレークである可能性が高い。２次加工は、まず最初に素材剥片の打面側側縁を完全に取り去る大きな剥離がなされ、次ぎにやや細かな剥離が基部側に数回なされる。これらの調整剥離はほとんどが腹面から行われるが、一部背面側からのものもある。基部は古く欠損し、その後に微細な剥離が見られる。先端部には、背・腹両面に使用に伴うと思われる小剥離痕が残る。刃部底面側にみられる剥離は、風化の度合いが他の面と違うため、後のものであろう。石材の石理方向は素材底面にほぼ平行し、素材剥片は半順目に剥離されている。

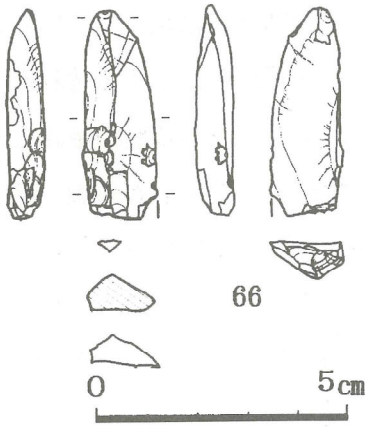


図22　石器

最大長4.2㎝、最大幅1.5㎝、最大厚0.7㎝、重さ5.4ｇである。[34]

67は自然石 (河原石) がみられ長径7.7㎝短径6.8㎝厚さ4.8㎝をはかり色調は淡白茶色を呈し赤色変化が見られる部分がありその部分は淡赤白色を呈する。これは火を受けた際にできたものと考えられる。

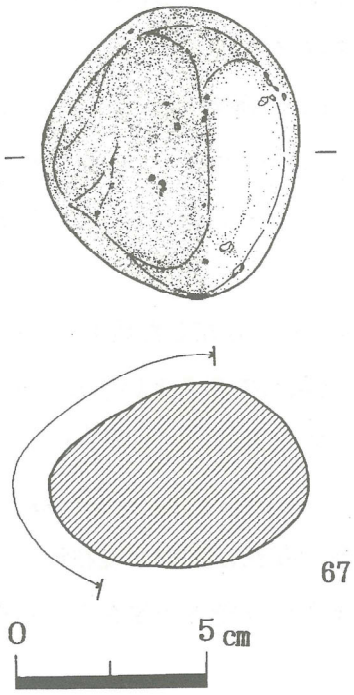


図23　石

(32)　小寺　律「手捏ねかわらけの製作技法の復元的研究のために」『中近世土器の基礎研究Ⅵ』 1990年12月 日本中世土器研究会

(33)　北播地域では口縁端部が面をなすものは量的には少ない傾向にあるようである。森下大輔氏に教示を得た。

(34)　中村信義氏に教示を得た。

(35) 兵庫県立博物館　神戸佳文氏にお世話になり、小栗栖健治氏、松井良祐氏に教示を得た。

(36) (30)に同じ。

(37) 姫路市教育委員会 大谷輝彦氏に文章並びに実測、トレースまでお世話になった。記して謝意を表す次第です。

第３節　まとめ

確認調査では南端(調査区１)において包含層のみがみられ遺構面は確認されなかったために包含層から出土する遺物を中心に調査を行うこととした。しかし、下層からは遺構面と考えられる粘質土の基盤が確認できそこに掘り込む形で溝状遺構並びにｐｉｔ類がみられた。これらは包含層の下層から掘り込まれる形を取り、包含層よりも古い時代と考えられる。この包含層は上層と下層に分けられ上層では近世陶磁を含むことから近世以降の年代が与えられる。また、下層は旧石器をはじめ、弥生土器等も混じるがおおむね13世紀～15世紀代の遺物によって占められることから、その頃の包含層と考えたい。それからすると遺構は15世紀以前の年代が考えられる。

中心となる時期は中世といえるが包含層遺物とはいえ旧石器時代に属するものがみられるのは注目される。当町において過去、旧石器の遺物が発見されたのは河岸段丘でも高位面に該当する場所であった。今回は氾濫原とはいえ低位面からの遺物の出土により低位面でも注意する必要性がでてきたといえる。また、弥生土器の出土で未確認であった雲津川下流域の弥生遺跡の存在を示唆するもので今後の周辺調査においても注意すべき必要性がでてきたといえる。

溝状遺構の時期は出土遺物から判断すると12～13世紀という年代が与えられ、建物跡も同様の年代が考えられる。文献にみられる安徳寺は正応四年(1291)の文書の中にみられ13世紀代にはすでにその存在がみられる。少なくとも13世紀末葉以前にその存在が考えられる。そう考えると今回の調査で出土した遺物は安徳寺の記録にみられる時期と重なり興味深いものがある。また、出土遺物の中には輸入磁器の破片もみられ、また、墨書土器もみられることから一般的な集落から出土するものではないと考えられ、遺跡の性格も絞られてくると思われるが、安徳寺に近接することからも寺院関連の遺跡としてとらえておきたい。

ただ、安徳寺の寺域は現況では定かでないが、明治にみられる庵として存在した状況や正応四年の里寺13ヵ寺の中にみられるもので現在も確認できるものと比較してみるといずれもそう大きくはない。それからすれば現在あるような安徳寺の規模とみて大過ないと考えられる。現在の寺は記録では少なくとも19世紀代にはそこに存在していたことがわかるが、それ以前は同様の場所にみられるのかどうかは定かでない。しかし、桶川の泉の存在は建物が現在地よりも東に存在した可能性を示し、今回の建物跡の検出は部分的ではあるが安徳寺が現在よりも東に存在した可能性を示唆する。

建物跡とみられるｐｉｔには柱根を伴うものもみられ、中には明かに焼けた状態で炭化して

いるものもみられる。また、遺物の中にみられる自然石には表面に赤色変化がみられ火を受けているものと考えられるものもある。この2点からのみであるが、この建物に火が関連していることが考えられ、火災等による罹災が考えられる。

少なくとも13世紀代に建物は存在していた可能性が高い。また、15世紀以降は旧耕作土が見られることからそれ以降はそこに建物が存在したとは考えられない。

以上、今回の調査では制約を受けているとはいえ調査区内の建物の廃絶期と遺跡の変遷を考える上で貴重な資料を提供してくれた。

遺物観察表

番号	器種 器形	法量(cm) 口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	成形・調整	備考	遺構	押図	図版
確認調査												
1	土師器 皿	8.5	1.5	—	密	内 暗茶色 外 淡茶色	良 好	口縁部はナデ 底部は圧痕		調査区 1	10-1	9
2	〃 〃	7.6	1.2	—	〃	内 暗茶色 外 白茶色	〃	口縁部横ナデ 底部外面に圧痕		〃	10-2	9
3	〃 〃	7.4	1.0	—	〃赤褐色砂粒が極少量混じる	内 桃色 外 白茶色	〃	内外面ナデ 口縁端部は丸い		〃	10-3	9
4	〃 〃	7.2	1.5	—	〃	内 明白色 外 暗白茶色	〃	口縁部はナデ 底部は圧痕		〃	10-4	9
5	〃 〃	13.4	2.3	—	〃	内 淡黒茶色 外 黒茶色	〃	体部内面・口縁部はナデ 体部外面圧痕	内外面に炭素	〃	10-5	9
6	〃 〃	14.0	2.7	—	〃	内 淡白茶色 外 黒茶色	〃	2 段ナデ		〃	10-6	9
7	〃 〃	15.4	1.7	—	〃赤褐色砂粒が極少量混じる	内 白茶色 外 淡茶色	〃	体部および口縁部ナデ		〃	10-7	9
8	〃 鍋	30.4	—	—	〃1 ～3 mm大の砂粒を含む	淡白茶色	〃	口縁部横ナデ 面をもつ・平行タタキ		〃	10-15	9
9	須恵器 甕	—	—	—	〃1 cm程度の小石を1 点含む	暗灰色	やや良	平行タタキ	粘土状のものが付着	〃	10-13	9
10	〃 杯	—	—	—	〃	暗青灰色	良 好	底部・糸切り痕	硬く焼ける	〃	10-9	9
11	〃 〃	—	—	—	〃	暗灰色	〃	〃		〃	10-10	9
12	〃 〃	—	—	—	〃	暗灰色	〃	〃		〃	10-11	9
13	磁器 椀	—	—	—	〃	暗灰色	〃	口縁部玉縁	横田・森田編年Ⅳ類	〃	11-17	9
14	須恵器 杯	—	—	—	〃白色砂粒を含む	黒灰色	やや不良	底部・糸切り痕	生焼け？	調査区 2	10-12	9
15	〃 こね鉢	29.0	—	—	やや密	暗紫灰色 口縁 暗黒色	良 好	重ね焼き痕	森田編年第Ⅷ期2段階	調査区 8	10-14	9
16	磁器 椀	—	—	—	精緻	暗緑灰色	〃	内外面に施紋 同安窯系	岡田編年 BⅢ類	調査区 11	11-16	9
17	土師器 脚	—	4.1	—	密	赤茶色	〃	8 つの平坦面		調査区 12	11-18	9
18	〃 皿	15.7	2.2	—	〃茶褐色砂粒を含む	内 淡白茶色 外 淡茶色	〃	底部指押さえ		調査区 13	10-8	9
本調査												
19	土師器 皿	8.6	1.2	—	やや密	淡茶灰色	良 好	内面・口縁部はナデ 底部指押さえ		P—1	17-19	16
20	木 柱根	14.6	21.8	—					ヒノキ	〃	17-25	16
21	須恵器 杯	—	—	—	密	暗灰色	良 好	底部		P—2	17-20	16
22	木 柱根	10.4	24.5	—					ヒノキ	〃	17-24	16
23	〃 〃	1.9	4.6	—				炭化あり	マツ類	P—3	17-21	16
24	〃 〃	4.3	7.8	—				〃	ヒノキ	〃	17-22	16
25	〃 木製品	2.0	10.6	—				加工面あり	マツ類	〃	17-23	16

遺物観察表

番号	器種 器形	法量(cm) 口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	成形・調整	備考	遺構	押図	図版
26	弥生土器 壺	—	—	—	密3㎜大の砂粒を多量に含む	淡白茶色	良好	2条の凸帯あり		包含層	18-26	17
27	〃 甕	—	—	—	〃	暗茶色	〃	外面に平行タタキ		〃	18-27	17
28	土師器 皿	8.6	1.2	—	〃	赤茶色	やや良			〃	18-28	17
29	〃 〃	9.4	1.2	—	〃	淡白茶色	良好			〃	18-29	17
30	〃 〃	8.5	1.2	—	〃	淡茶褐色	〃	ナデ調整		〃	18-30	17
31	〃 〃	8.8	1.2	—	〃	内 淡灰白色 外 淡茶白色	やや良	成形時の粘土痕 ナデ調整		〃	18-31	17
32	〃 鍋	—	—	—	〃	内 淡桃色 外 淡白茶色	〃	口縁端部が外に膨らむ		〃	18-32	17
33	〃 〃	—	—	—	〃 1㎜大の砂粒を含む	暗茶褐色	〃	口縁端部が面をもつ	陶質	〃	18-34	17
34	〃 〃	—	—	—	〃 白色砂粒を多量に含む	〃	〃	内面に厚みをもつ		〃	18-33	17
35	〃 〃	—	—	—	〃	淡白茶色	良好	平行タタキ	土師質	〃	18-35	17
36	〃 〃	—	—	—	〃 2㎜大の砂粒を含む	内 淡黒灰色 外 暗灰褐色	〃	〃	硬質	〃	18-36	17
37	〃 羽釜	—	—	—	〃 1㎜大の砂粒を含む	内 淡橙色 外 淡白茶色	〃	鍔が不明瞭		〃	18-37	17
38	〃 〃	—	—	—	〃 〃	淡白茶色	〃	鍔が明瞭		〃	18-38	17
39	〃 土錘	1.0	2.5	—	〃	淡灰色	〃	穴の直径0.4㎝		〃	18-42	17
40	〃 カマド	—	—	—	やや密 白色砂粒を多量に含む	内 暗茶褐色 外 暗茶色	やや良	内 指押さえ 外 ハケメ		〃	21-64	17
41	〃 〃	—	—	—	〃 〃	〃	〃	内 指ナデ、指押さえ 外 ハケメ		〃	21-65	17
42	須恵器 杯	17.0	—	—	密	内 暗灰色 外 白灰色	良好	横ナデ		SD8	19-43	16
43	〃 〃	16.2	4.4	6.8	〃	暗灰色	〃	底部糸切り痕		〃	19-44	16
44	〃 〃	16.2	4.3	6.0	〃	暗紫灰色	〃	〃		〃	19-45	16
45	〃 〃	17.3	5.2	5.6	〃 3～5㎜大の砂粒を少量含む	〃	〃	〃	墨書	〃	19-46	16
46	〃 〃	—	—	6.2	〃 白色砂粒を含む	〃	〃	〃		〃	19-47	16
47	〃 〃	16.4	4.7	5.6	〃	暗灰色	〃	〃		〃	19-48	16
48	〃 〃	—	—	6.6	〃	内 暗青灰色 外 暗灰色	〃	〃		包含層	19-51	18
49	〃 〃	—	—	6.6	〃	暗灰色	〃	〃 後にナデ調整		〃	19-52	18
50	〃 〃	—	—	4.8	〃	暗青灰色	〃	〃		〃	19-53	18
51	〃 〃	—	—	5.6	〃	暗灰色	〃	〃		〃	19-54	18
52	〃 〃	—	—	8.0	〃	白灰色	〃	〃		〃	19-55	18

遺物観察表

番号	器種 器形	法量(cm) 口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	成形・調整	備考	遺構	押図	図版
53	須恵器 皿	8.4	1.9	—	密	内　淡灰色 外　暗黒灰色	良　好		瓦質的	包含層	19-49	18
54	〃 〃	8.3	1.3	5.0	〃	暗青紫灰色	〃	糸切り痕　ナデ調整		〃	19-50	18
55	〃 甕	—	—	—	〃白色砂粒を含む	内　淡灰色 外　暗青灰色	〃	外　格子タタキ 内　同心円文		〃	20-56	18
56	〃 〃	—	—	—	〃	内　暗灰色 釉　暗緑色	〃	外　格子タタキ 内　ナデ	自然釉	〃	20-60	18
57	〃 〃	—	—	—	〃	暗青灰色	〃	外　綾杉タタキ 内　同心円文		〃	20-57	18
58	〃 〃	—	—	—	〃	〃	〃	外　綾杉タタキ 内　ナデ		〃	20-58	18
59	〃 〃	—	—	—	〃	暗灰色	〃	外　平行タタキ 内　ナデ		〃	20-59	18
60	〃 〃	—	—	—	〃	〃	〃	外　平行タタキ 内　ナデ		〃	20-61	18
61	〃 〃	—	—	—	〃白色砂粒を含む	暗黒灰色	〃	外　平行タタキ		〃	20-62	18
62	〃 壷	—	—	—	〃	内　暗青灰色 外　暗黒灰色	〃	ナデ		〃	20-63	18
63	瓦質土 器羽釜	—	—	—	〃1 ㎜大の砂粒を含む	内　暗灰色 外　黒灰色	やや良			〃	18-39	18
64	磁器 椀	—	—	—	〃	暗緑色	良　好	花弁あり 龍泉窯系	岡田編年 CⅠa2類	〃	18-40	18
65	陶器 椀	—	—	—	〃	暗茶褐色	〃		唐津?	〃	18-41	18
66	旧石器 ナイフ	—	—	—	サヌカイト	白灰色				〃	22-66	18
67	石 自然石	7.7	4.8	6.8		淡白茶色		火を受けたと思われる 淡赤白色部がある		〃	23-67	18

鑑　定　結　果

第４章　分析結果

第１節　樹種鑑定報告

１　出土場所と出土遺物

当遺跡出土のｐｉｔ内から樹木の出土がみられた。出土遺構はＰ－1、Ｐ－2、Ｐ－3である。Ｐ－1、Ｐ－2はそれぞれ柱根であり、Ｐ－3からは木片が3点出土した。

２　鑑定依頼

ｐｉｔ内の樹木がどのような種類で構成されるのかを検討するために樹種鑑定を依頼した。ｐｉｔは建物を構成すると考えられ、建物に用いられる樹木の種類を明らかにし、それぞれがどのように考えられるのであろうか。

鑑定にはＰ－1 (図17－25) の柱根の組織1点、Ｐ－2は同一のものながら２点に分離しており、試料を２点 (Ｐ－2－1＝図17－24、Ｐ－2－2とした)、Ｐ－3はＰ－1、Ｐ－2と同様の感がある木片1点 (Ｐ－3－2＝図17－22) と炭化が顕著な木片１点 (Ｐ－3－1＝図17－21) と加工痕が認められる木片1点 (Ｐ－3－3＝図17－23) の内、Ｐ－1、Ｐ－2－1、Ｐ－3－1、Ｐ－3－3の合計４点の鑑定を依頼した。

今回の樹種鑑定は、(財) 元興寺文化財研究所に依頼し、以下、概要および鑑定結果を記す。

３　樹種鑑定報告

(財) 元興寺文化財研究所

樹種鑑定概要

樹種の分類は、花、果実、葉など、種ごとに分化の進んだ器官の形態に基づいている。しかし、木材組織は、種ごとの分化が進んでいないため、組織上大きな特徴を有する種を除き、同定できない場合がある。種の同定が困難な場合は、科、亜科、族、亜族、属、亜属、節、亜節 (分類の大きい順) のいずれかで表す。

＊科、亜科、族、亜族、属、亜属、節、亜節、種の分類は、主に原色日本植物図鑑 (保育社) による。

①　切片作製

カミソリの刃で遺物をできるだけ傷つけないように注意しながら、木材組織の観察に必要な木口面 (横断面)、柾目面 (放射断面)、板目面 (接線断面) の３方向の切片を正確に作製する。

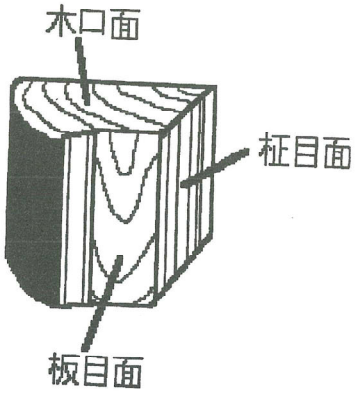


図24　樹木概要図

② 永久プレパラート作製

切片はサフラニンで染色後、水分をエチルアルコール、ｎ－ブチルアルコール、キシレンに順次置換し、非水溶性の封入剤（ＥＵＫＩＴＴ）を用いて永久プレパラートを作製する。

③ 同定方法

針葉樹については、早材から晩材への移行、樹脂道の有無、樹脂細胞の有無および配列、ラセン肥厚の有無、分野壁孔の形態等、広葉樹については道管の大きさや配列状態および穿孔の形態、柔組織の分布や結晶細胞の有無、放射組織の形態等を生物顕微鏡で観察し同定する。

④ 顕微鏡写真

木口面は30倍、柾目面は広葉樹100倍・針葉樹200倍、板目面は50倍で撮影する。

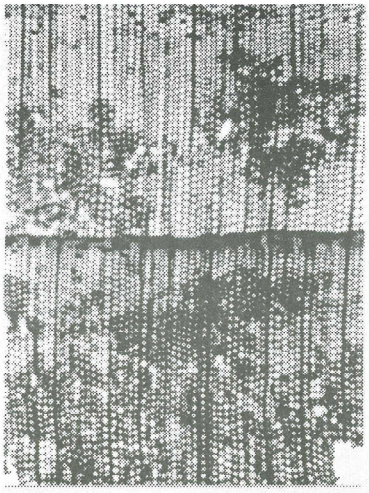
結果は以下の通りである。

遺物名	樹種名	備　　考
Ｐ－1	ヒ ノ キ	
Ｐ－2－1	ヒ ノ キ	
Ｐ－3－1	二葉松類	二葉松類に属する樹種、アカマツ、クロマツ等
Ｐ－3－3	二葉松類	二葉松類に属する樹種、アカマツ、クロマツ等

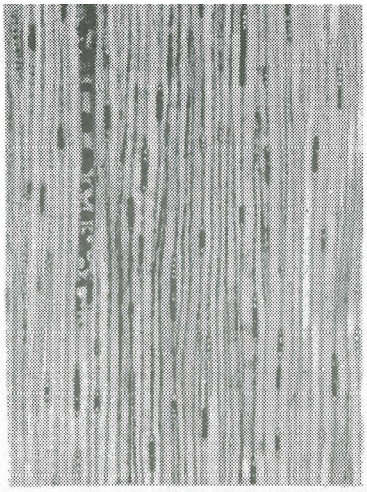
４　結果より

Ｐ－1、Ｐ－2より柱材はヒノキを使用していることが分かった。Ｐ－3－2（図17－22）は鑑定ができなかったが、Ｐ－1、Ｐ－2と同様の感があることからヒノキの可能性があり、柱材はヒノキを用いていたと考えられる。その他のものとしてマツ類が出土しており、柱材とは種類を異にする。柱材以外のものの可能性が高く。マツ類を用いるものを検討する必要性があろう。

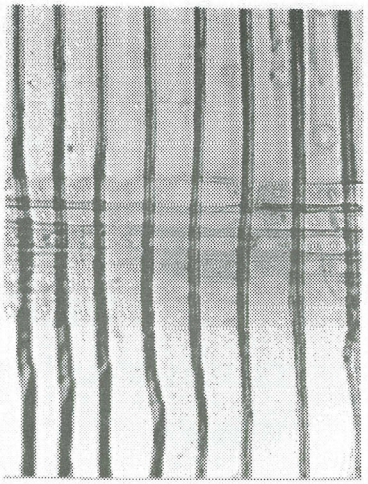
＊1.　2.　4.　以外は（財）元興寺文化財研究所の報告をそのまま掲載した。



木口　30倍

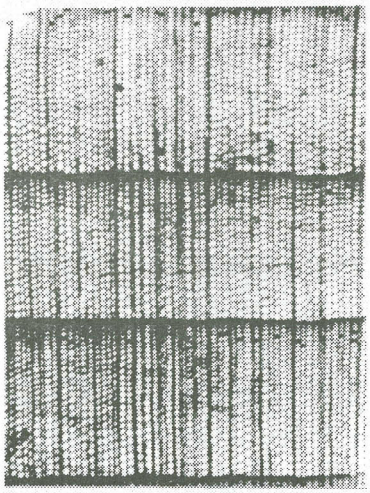


板目　50倍

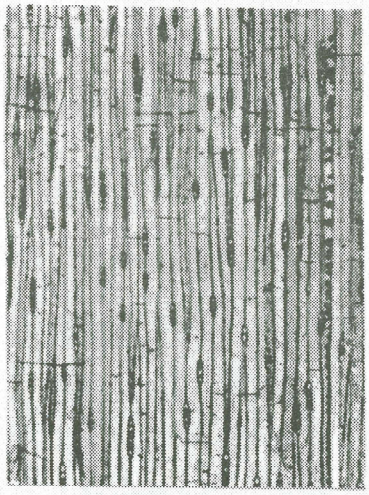


柾目　200倍

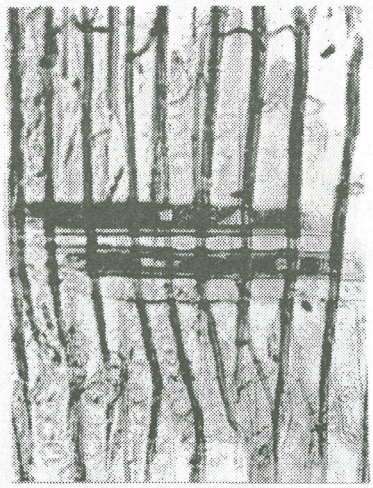
1．P－1　ヒノキ



木口　30倍

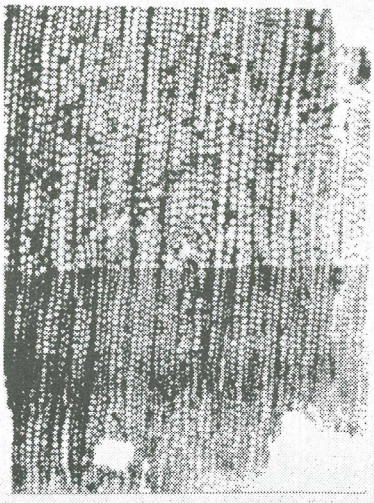


板目　50倍

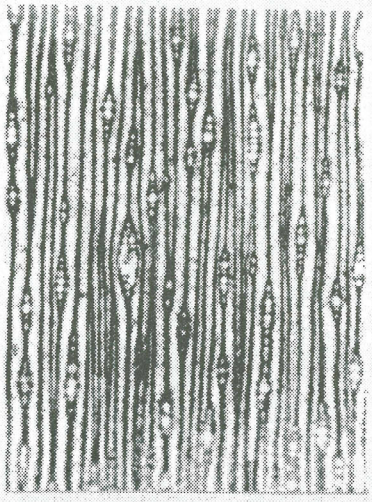


柾目　200倍

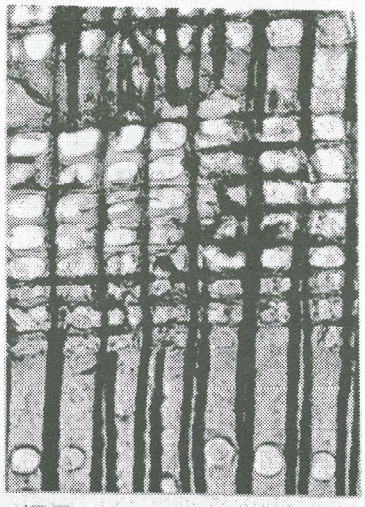
2．P－2－1　ヒノキ



木口　30倍

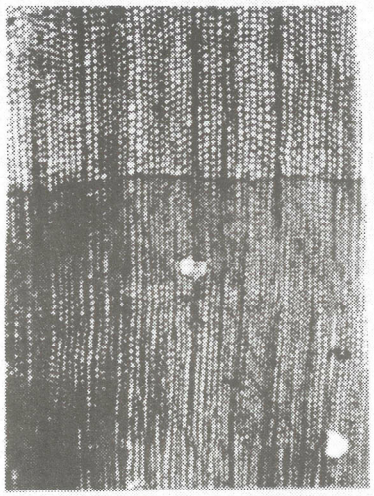


板目　50倍

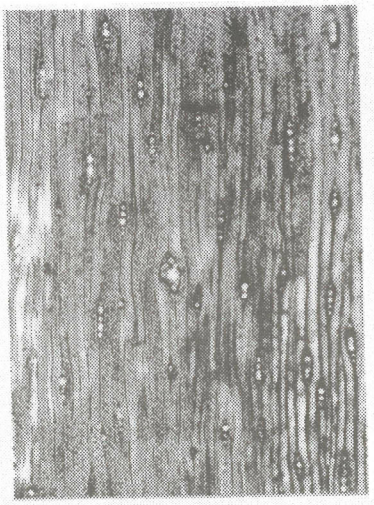


柾目　200倍

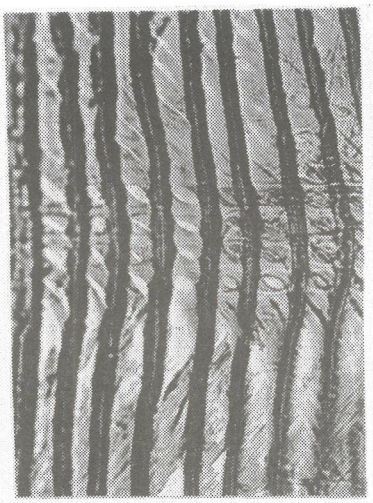
3．P－3－1　二葉松類



木口　　30倍



板目　　50倍



柾目　　200倍

4．P－3－3　二葉松類

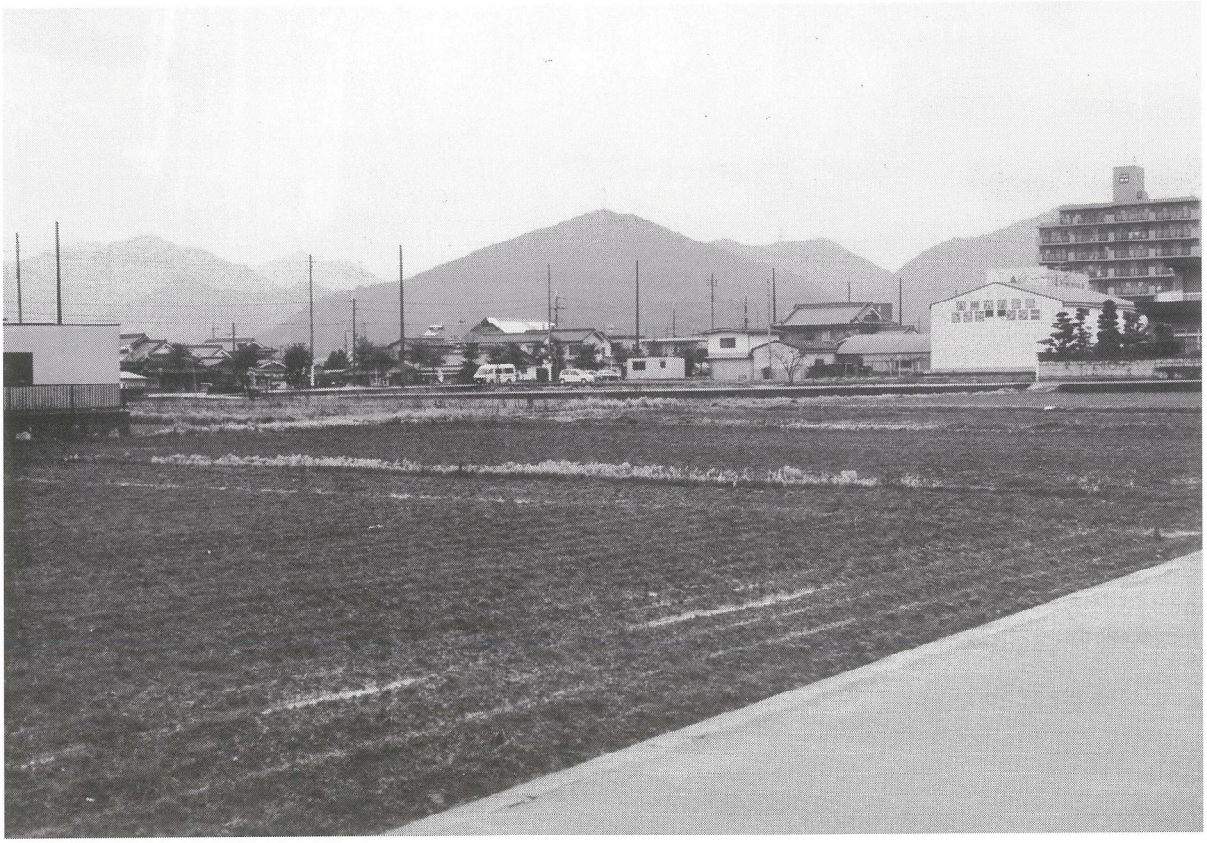
図版1

確認調査

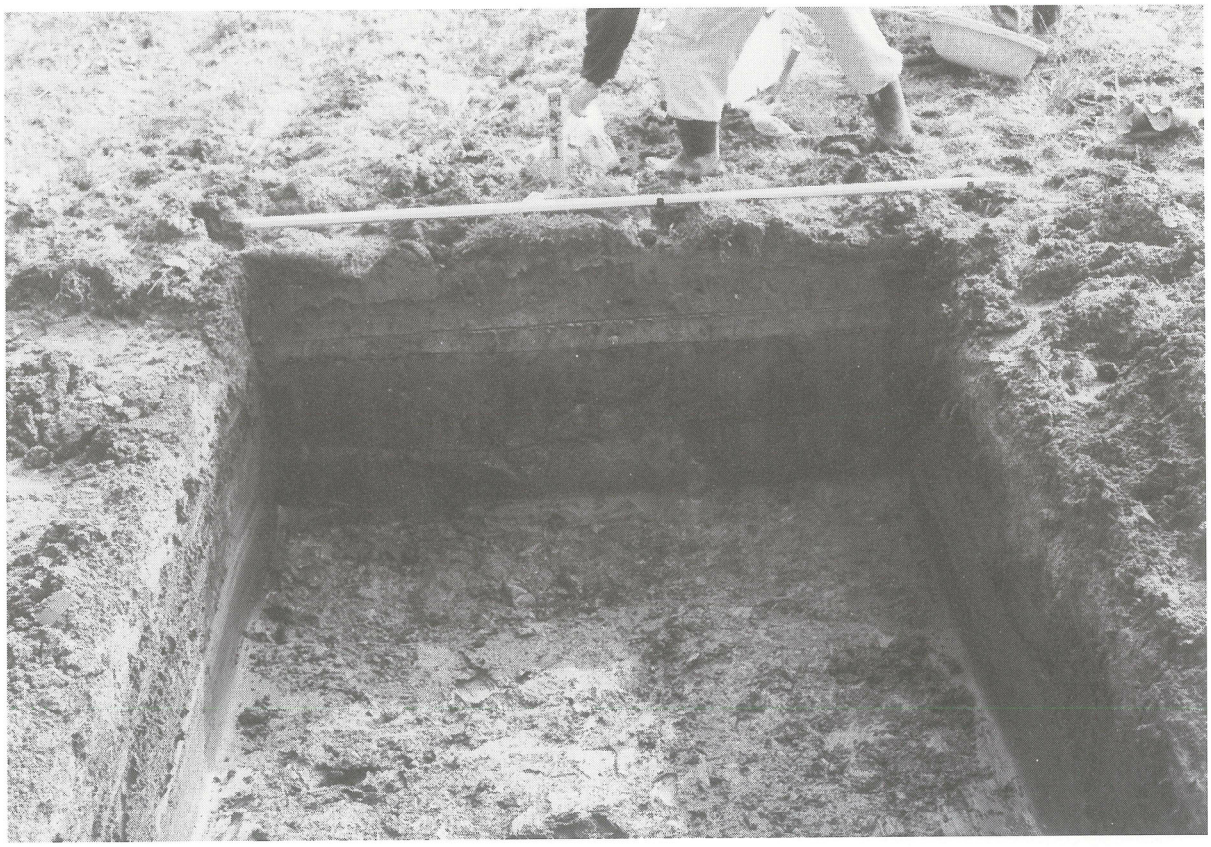
作業風景

作業風景

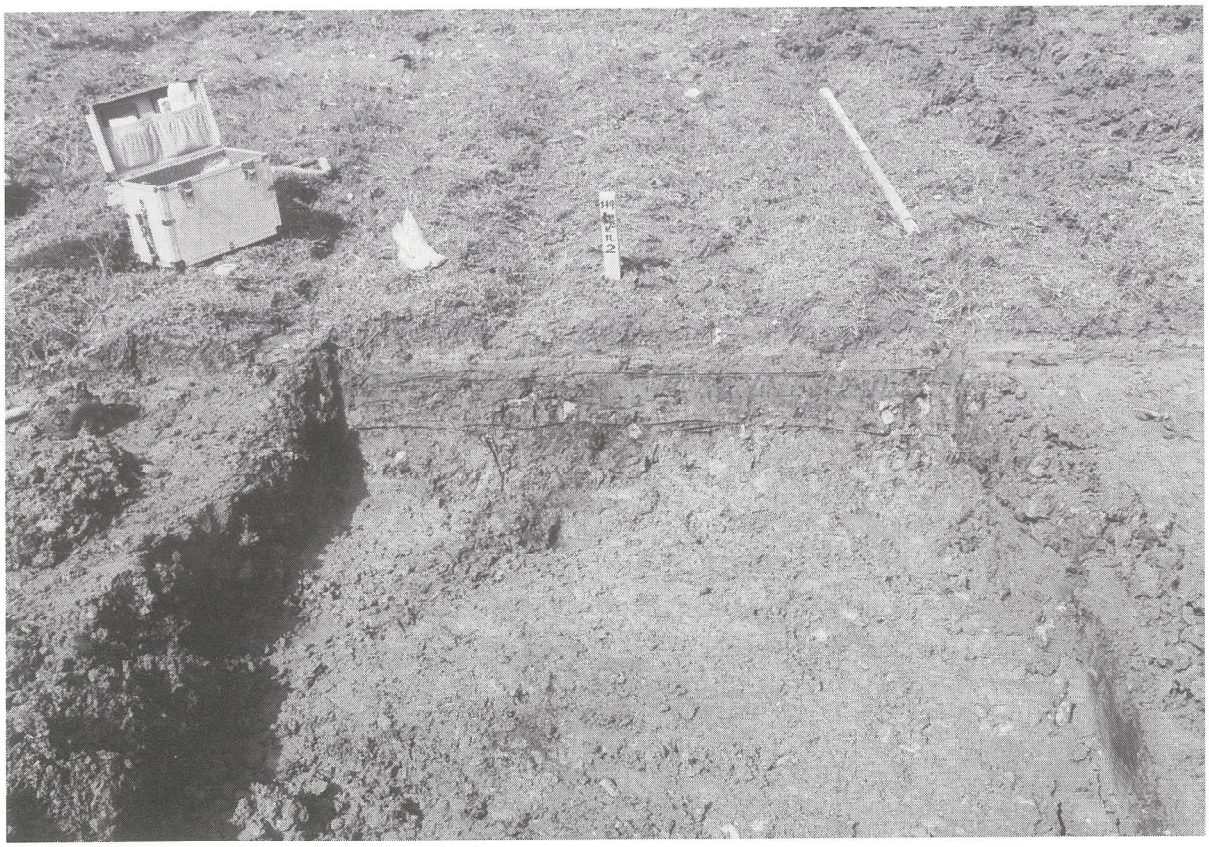
作業風景



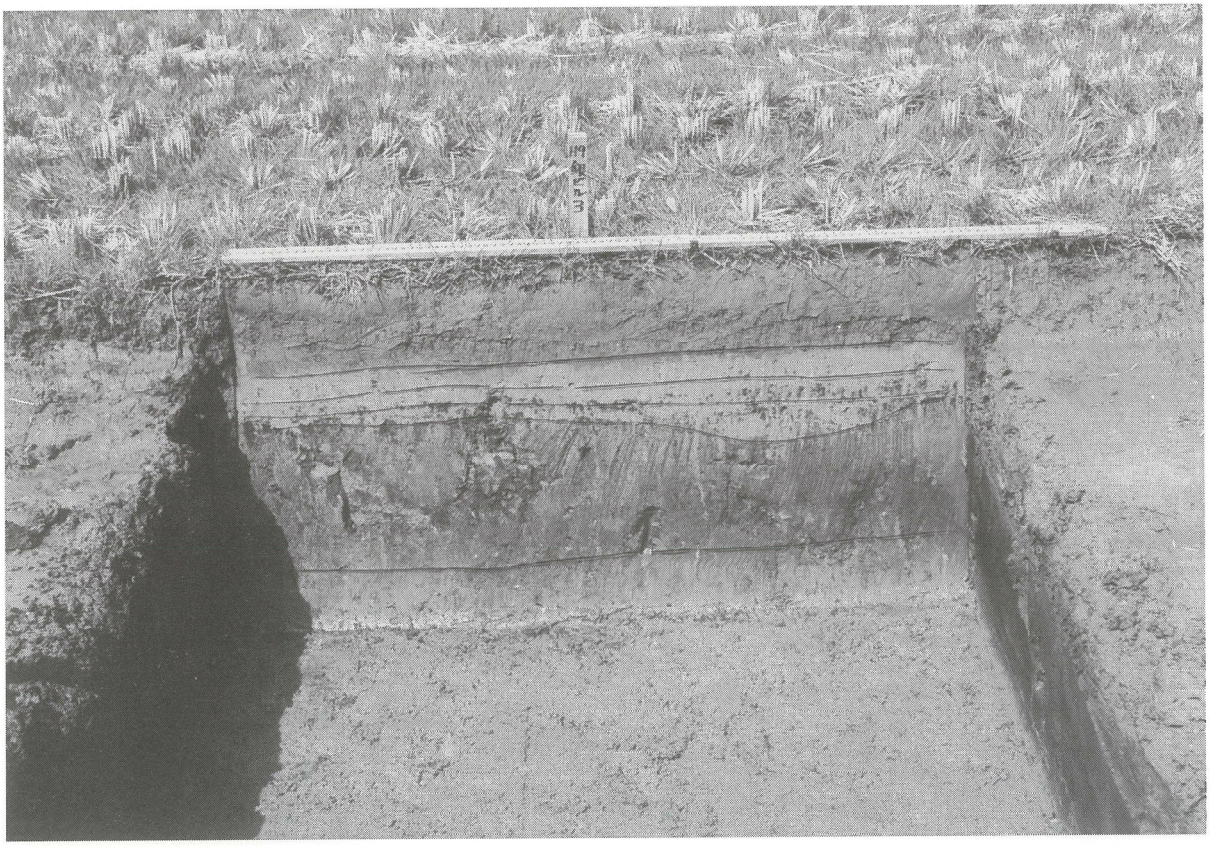
調査前の状況



調　査　区　1

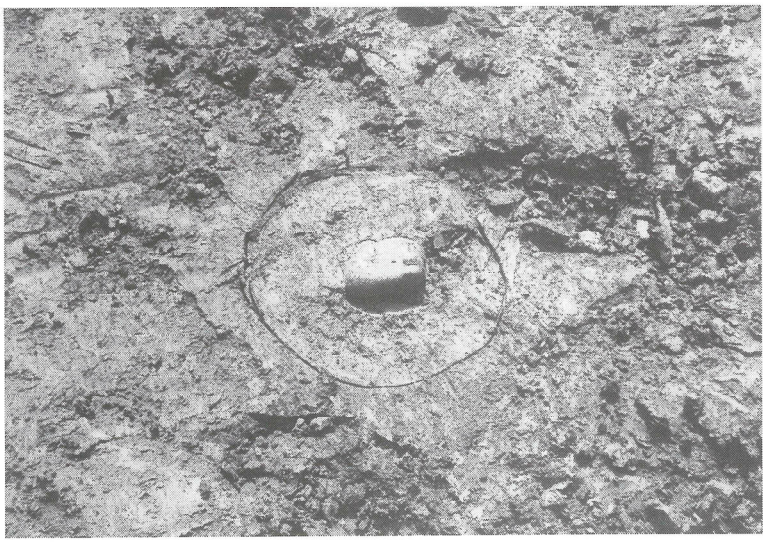


調　査　区　2

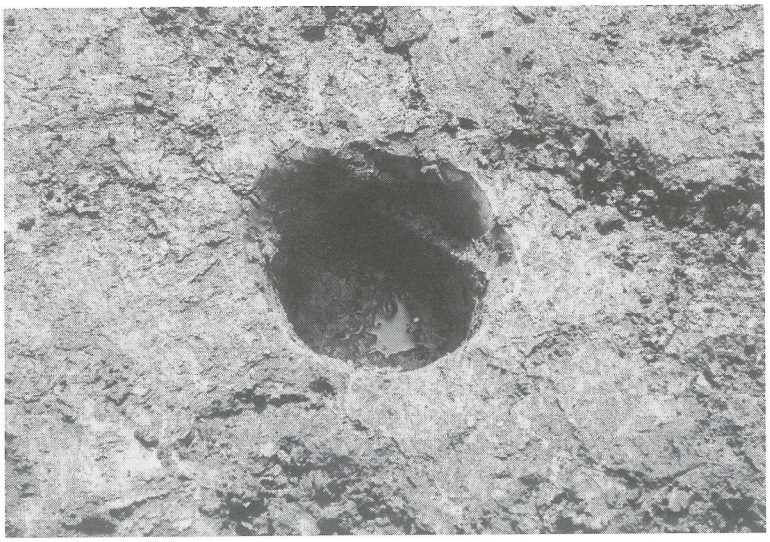


調　査　区　3

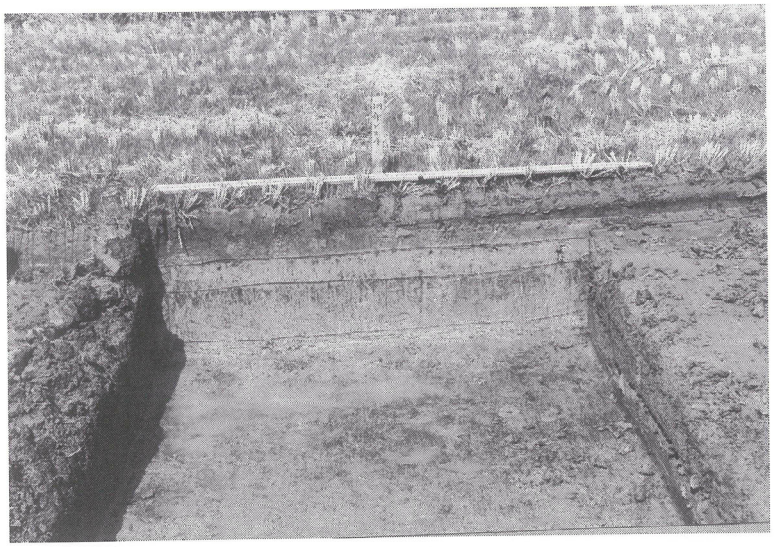
調査区３



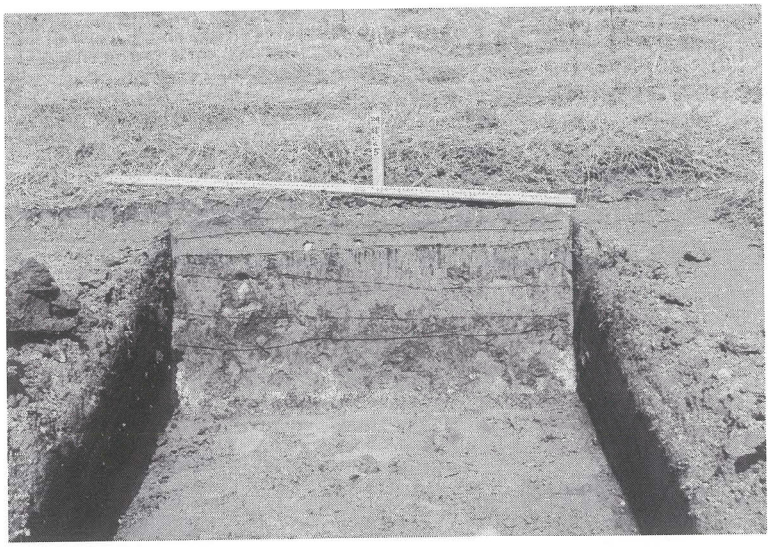
調査区３ｐｉｔ検出状況



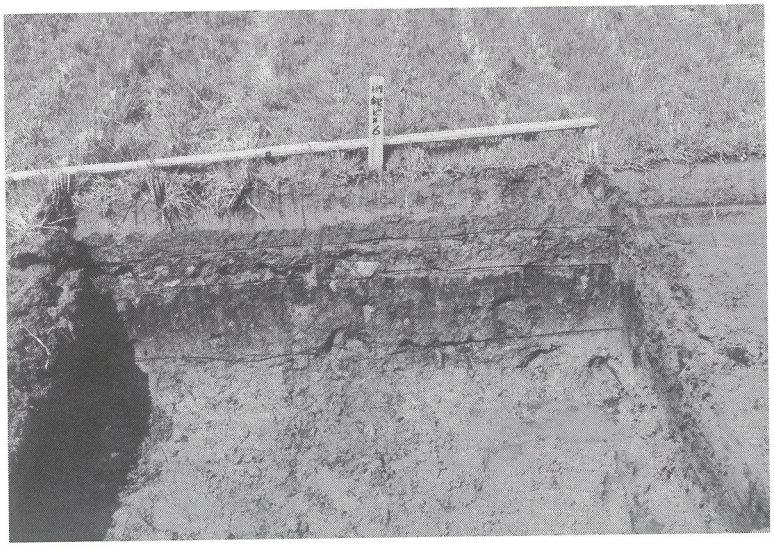
調査区３ｐｉｔ完掘状況



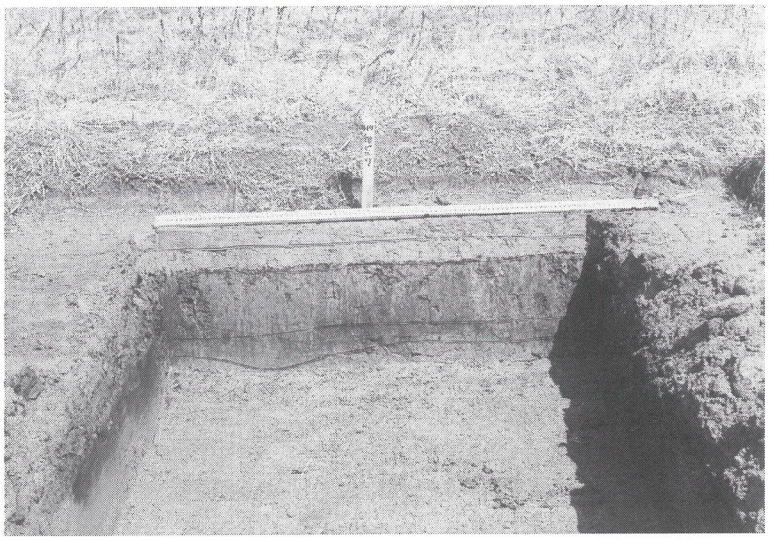
調査区 4



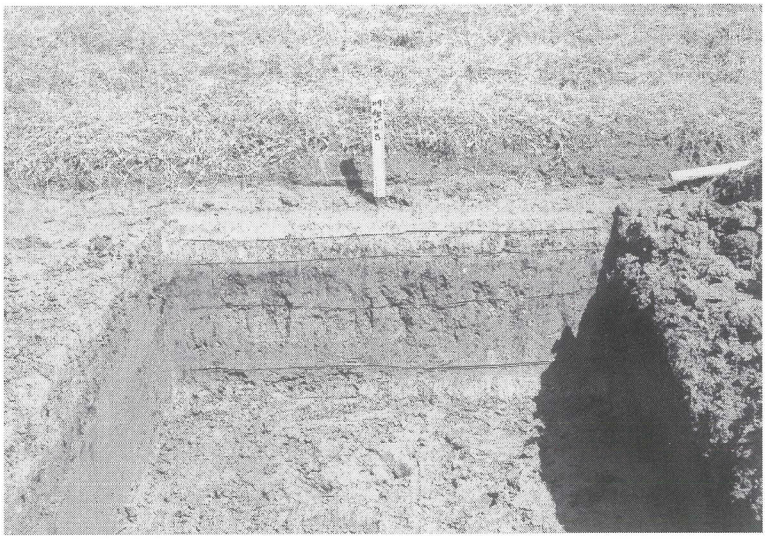
調査区 5



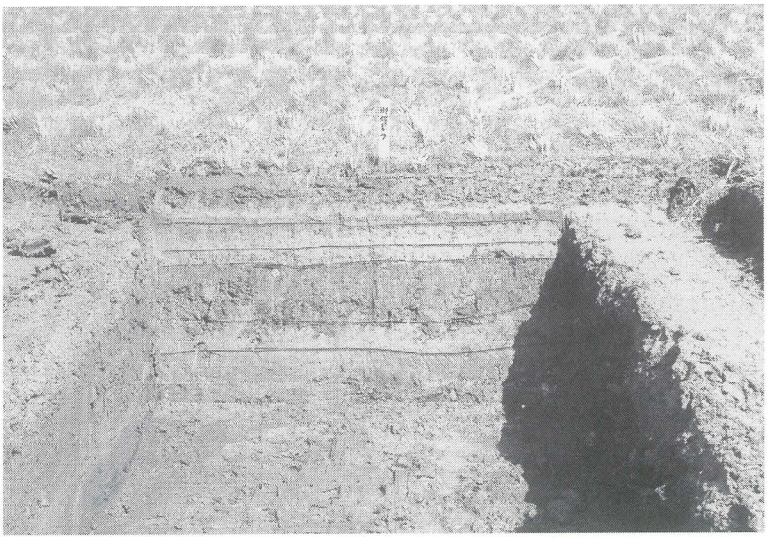
調査区 6



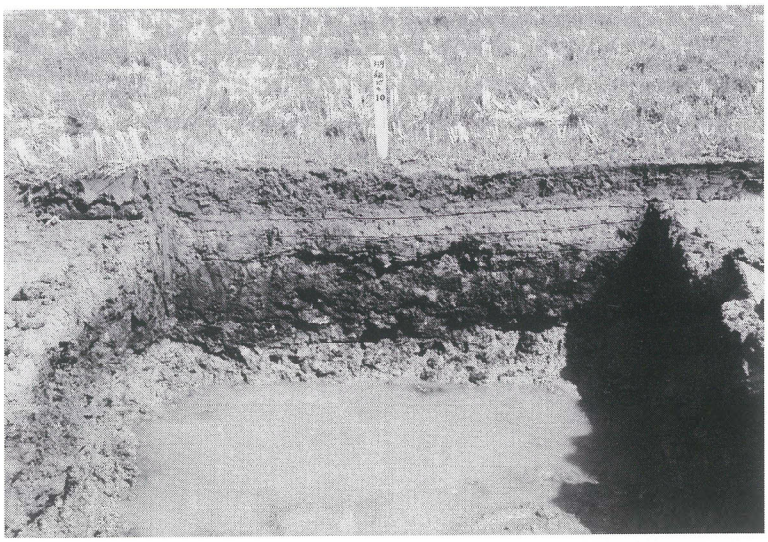
調査区7



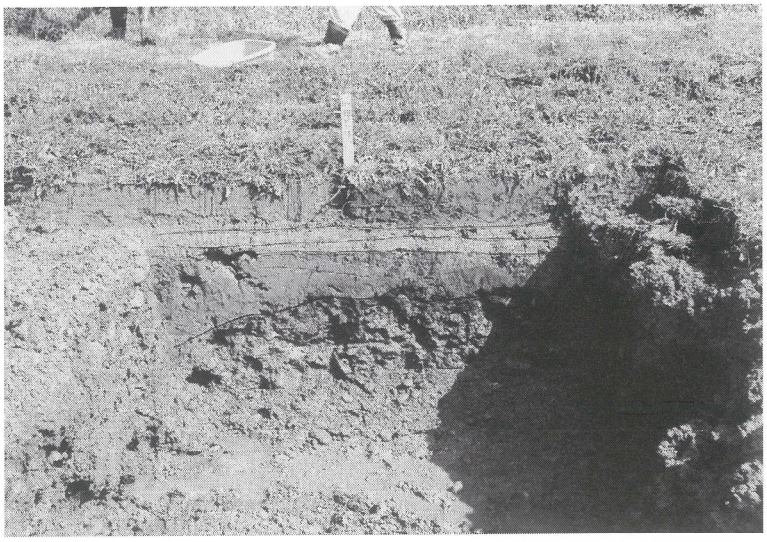
調査区8



調査区9



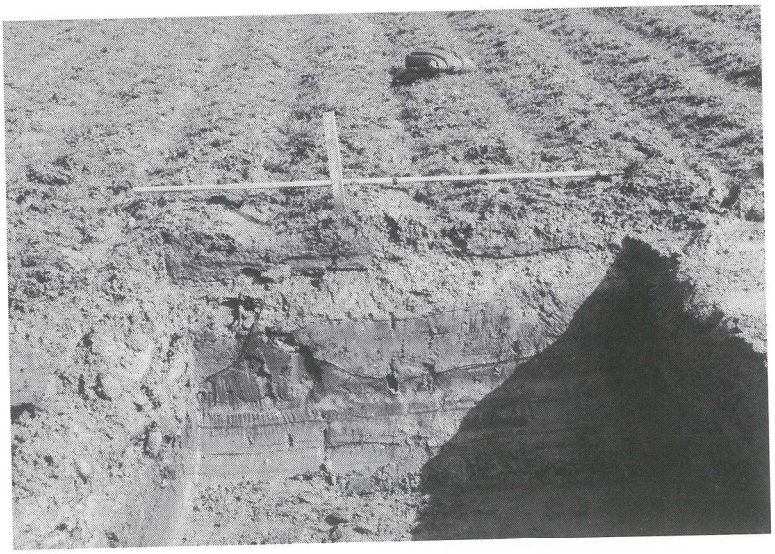
調査区10



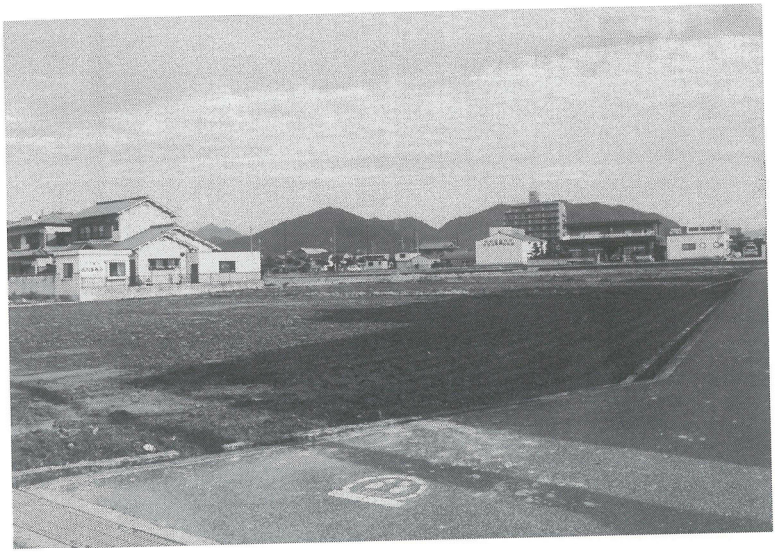
調査区11

調査区12

調査区13



調査区14

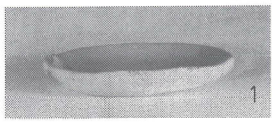


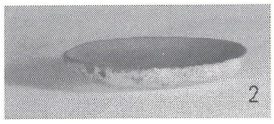
埋め戻し後の状況

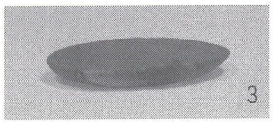
図版9

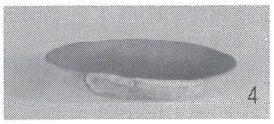
確認調査出土遺物

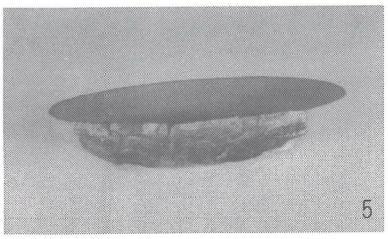
〔1～3＝調査区1、14＝調査区2、15＝調査区8
16＝調査区11、17＝調査区12、18＝調査区13〕

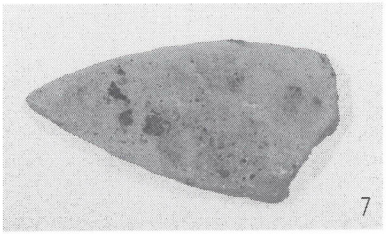


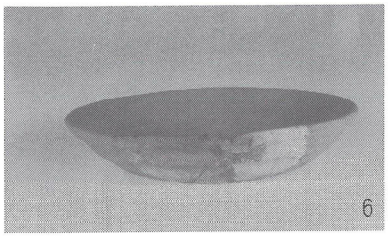


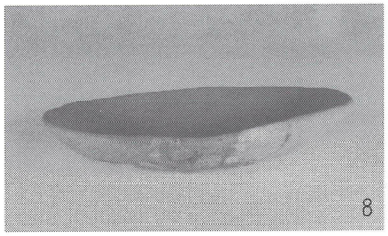


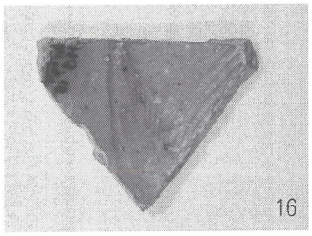


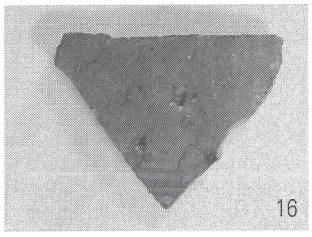


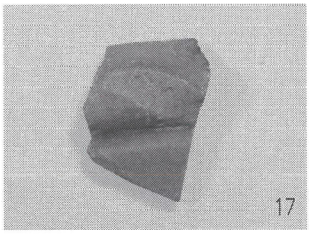


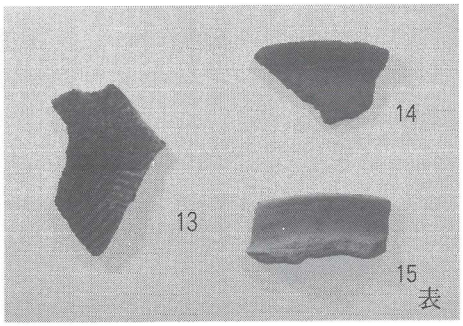


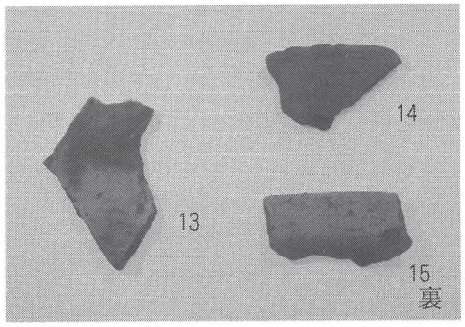


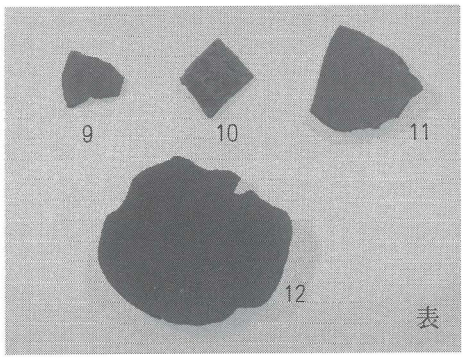


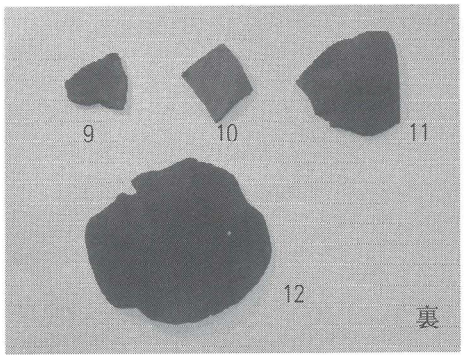






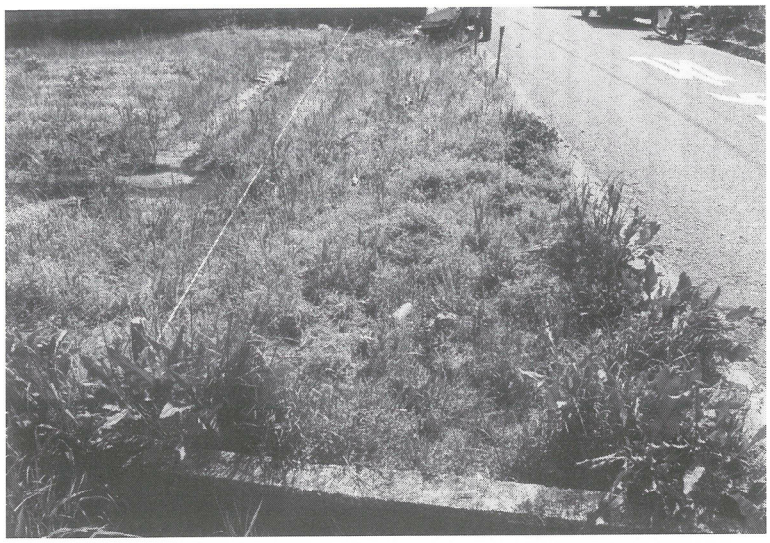






図版10

本調査



調査前の状況

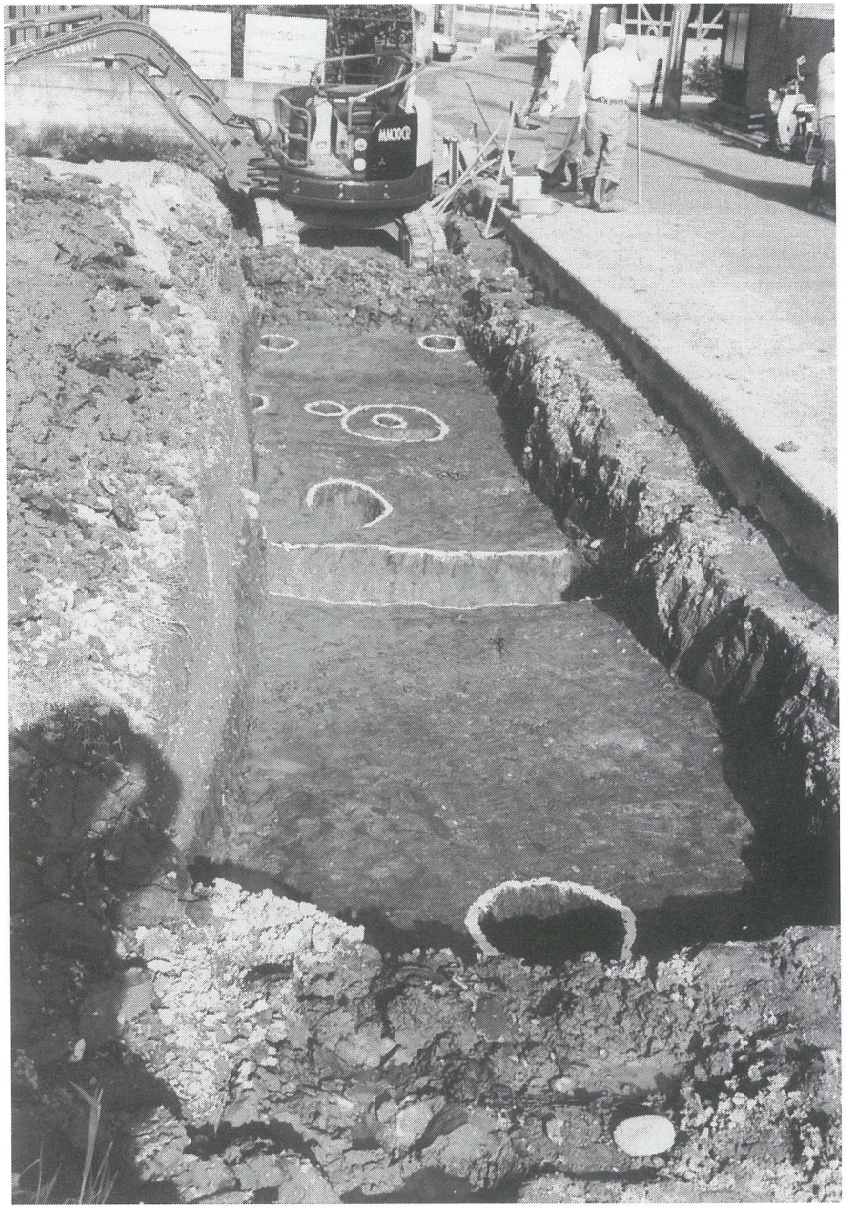
作業風景

上面検出状況

上面溝検出状況

上面溝完掘状況

遺構検出状況



遺構完掘状況

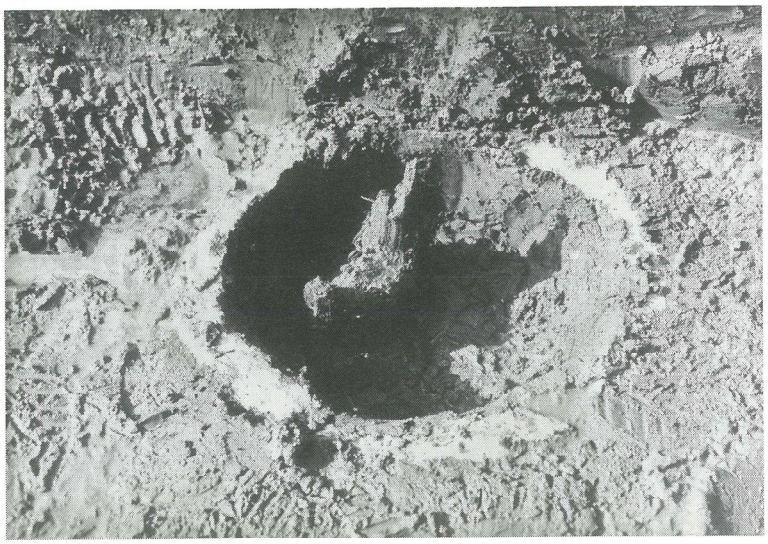
図版12

Ｐ－１、２遺構検出状況

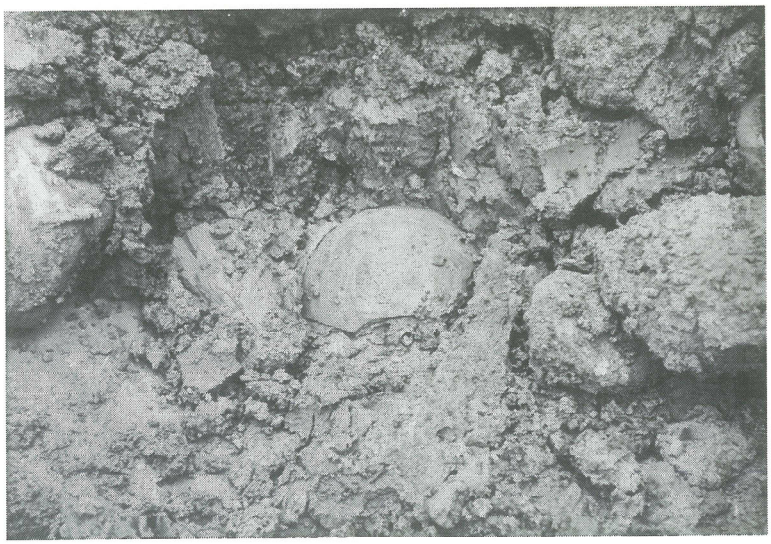
Ｐ－１、２遺構完掘状況

図版13

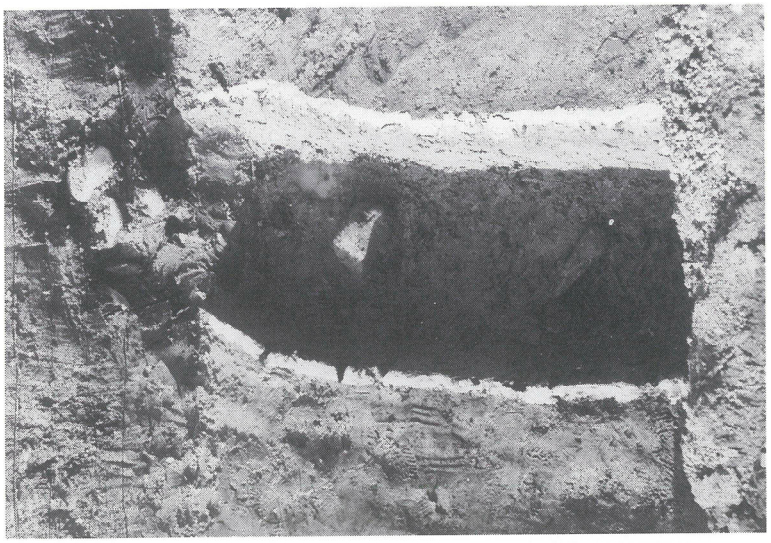
Ｐ－１柱根出土状況



Ｐ－２柱根出土状況

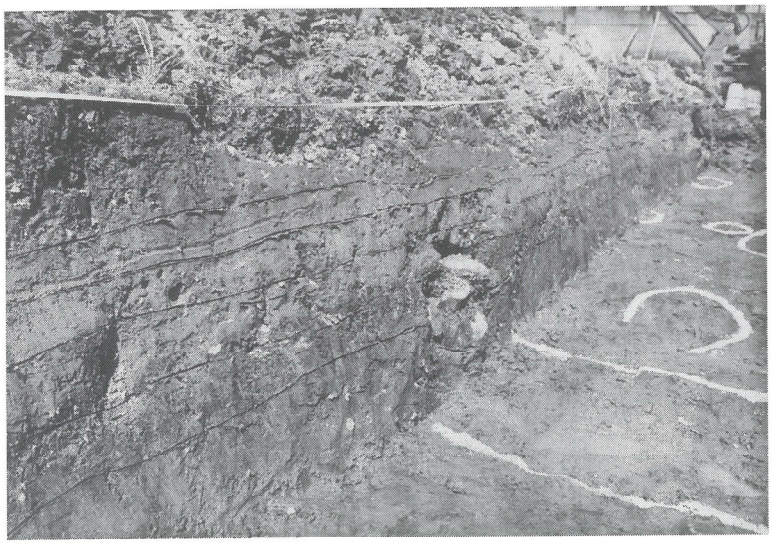


ＳＤ８遺物出土状況



ＳＤ８完掘状況

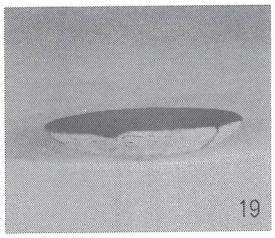
調査区土層堆積

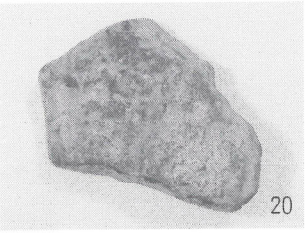


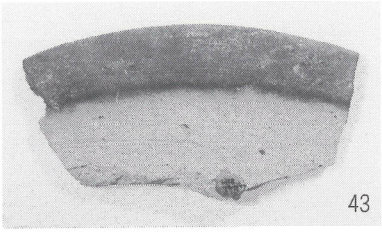
調査区土層堆積

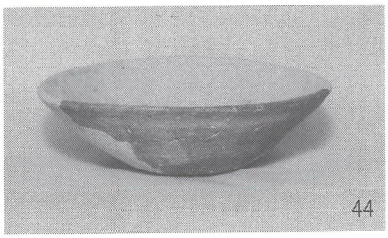
図版16

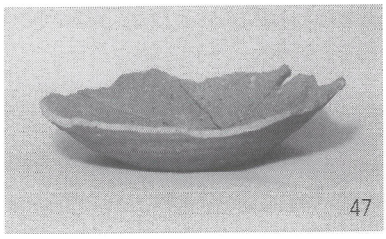
遺構内出土遺物（19・20＝P－1、21・22＝P－2、23～25＝P－3、42～47＝SD8）

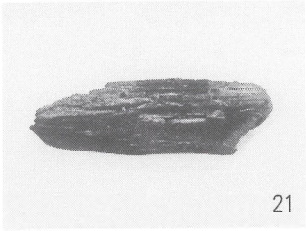

19

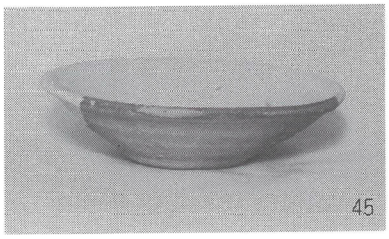

20

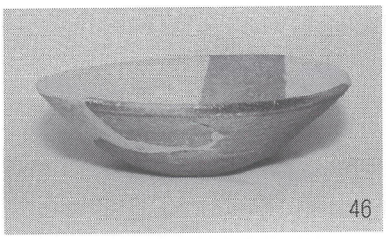

43

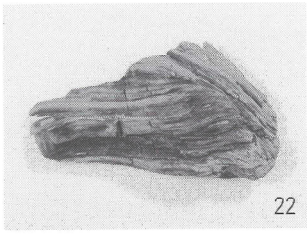

44

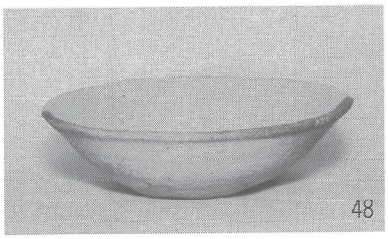

47

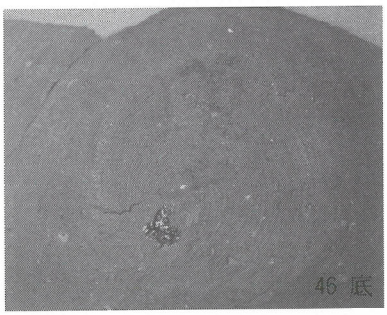

21

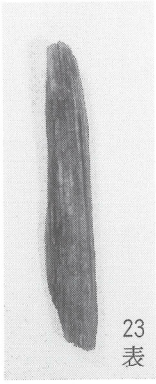

45

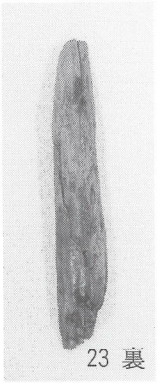

46

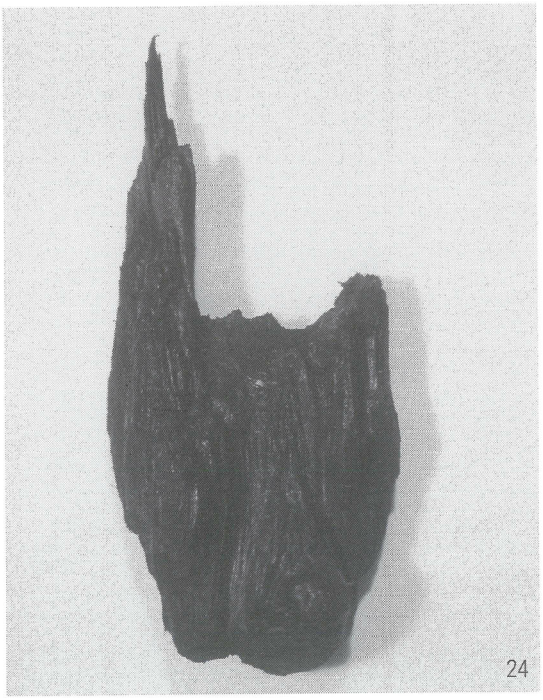

22

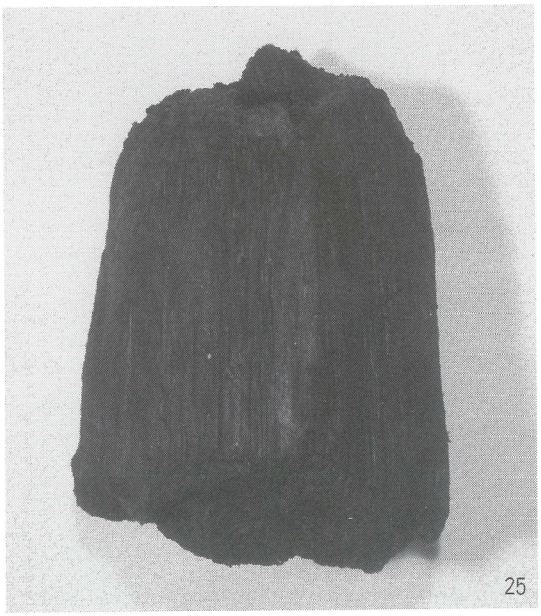

48


46 底


23 表

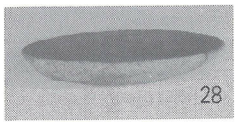

23 裏

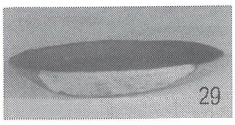

24

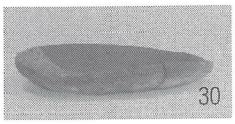

25

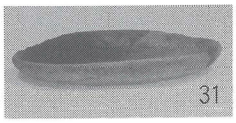
図版17

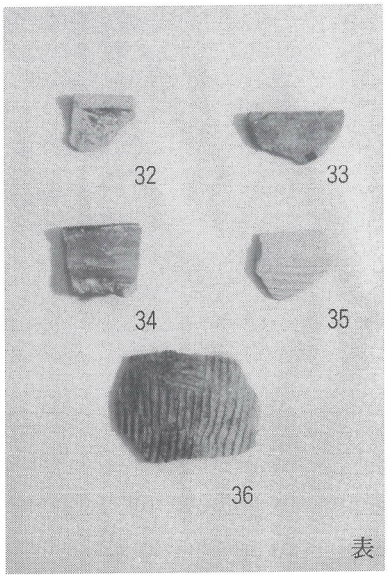
包含層出土遺物

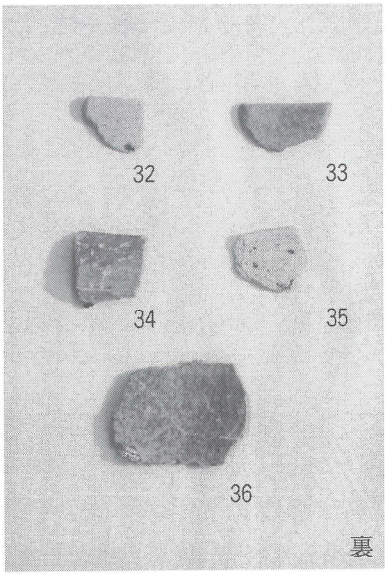

28

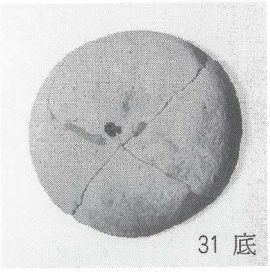

29

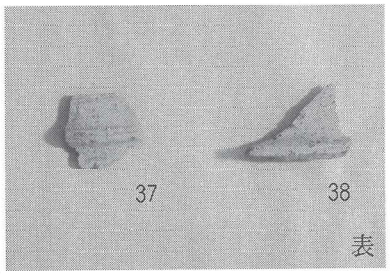

30

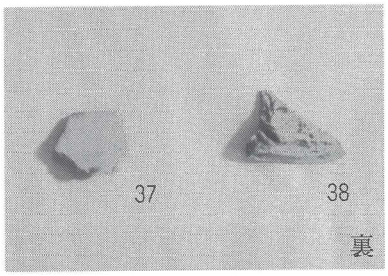

31

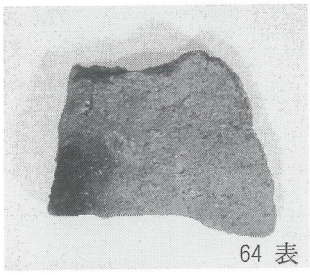

32 33 34 35 36 表

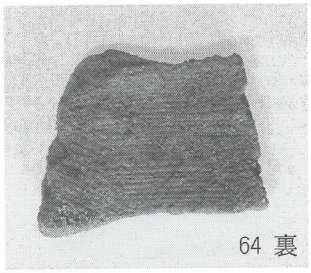

32 33 34 35 36 裏

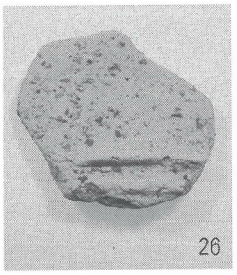

31 底

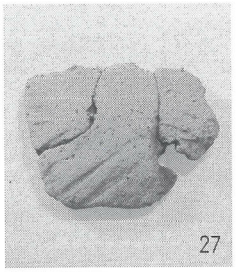

37 38 表


37 38 裏

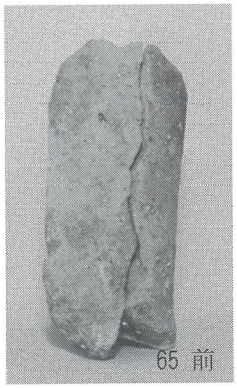

64 表

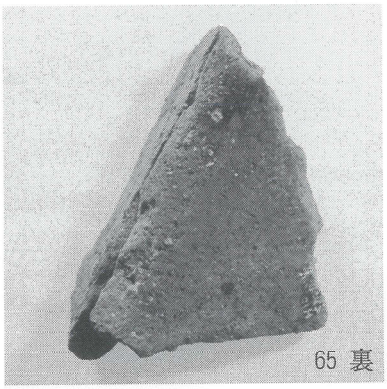

64 裏

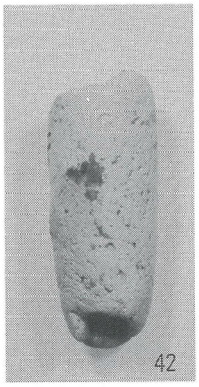

26


27

65 表

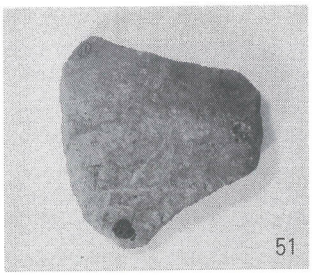

65 前

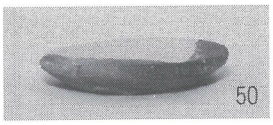

65 裏

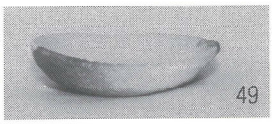

42

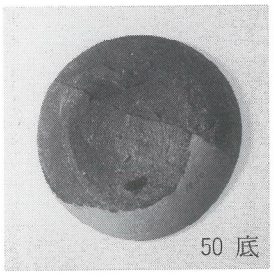
図版18

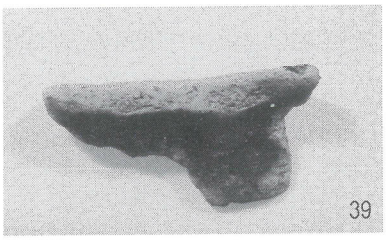
包含層出土遺物〔41上層 48〜67下層8〕

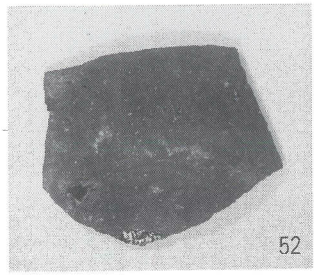

51

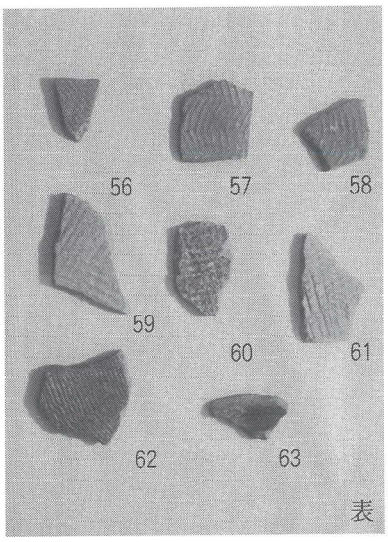

50


49

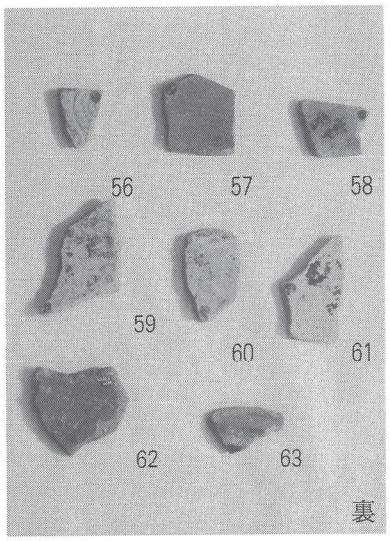

50 底


39

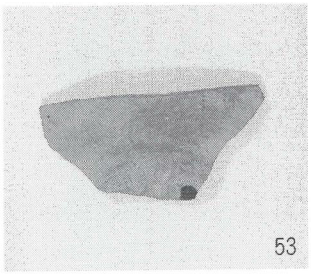

52

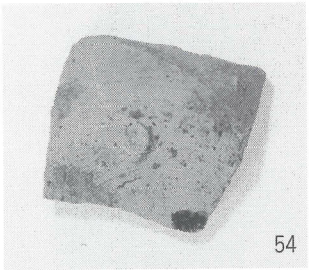


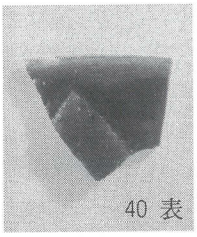
表

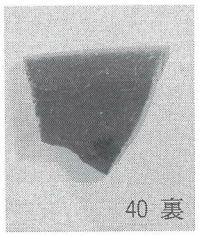


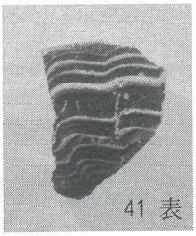
裏

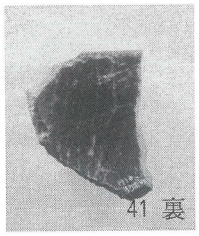

53

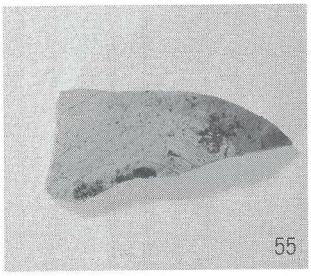

54

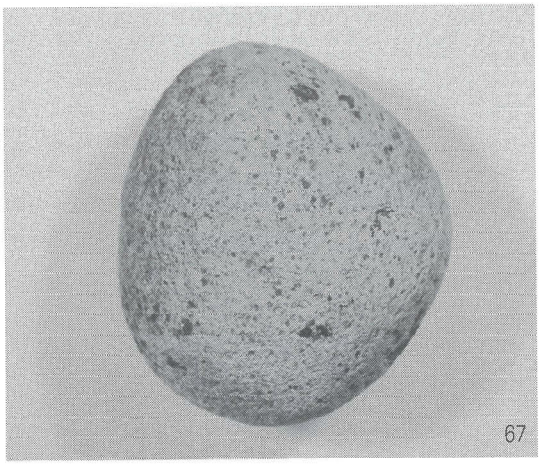

40 表

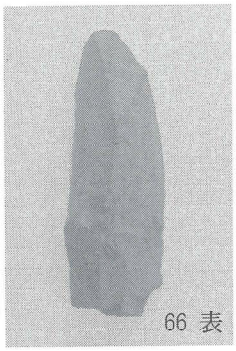

40 裏

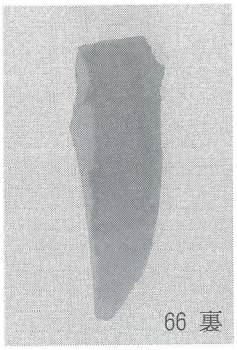

41 表


41 裏


55


67

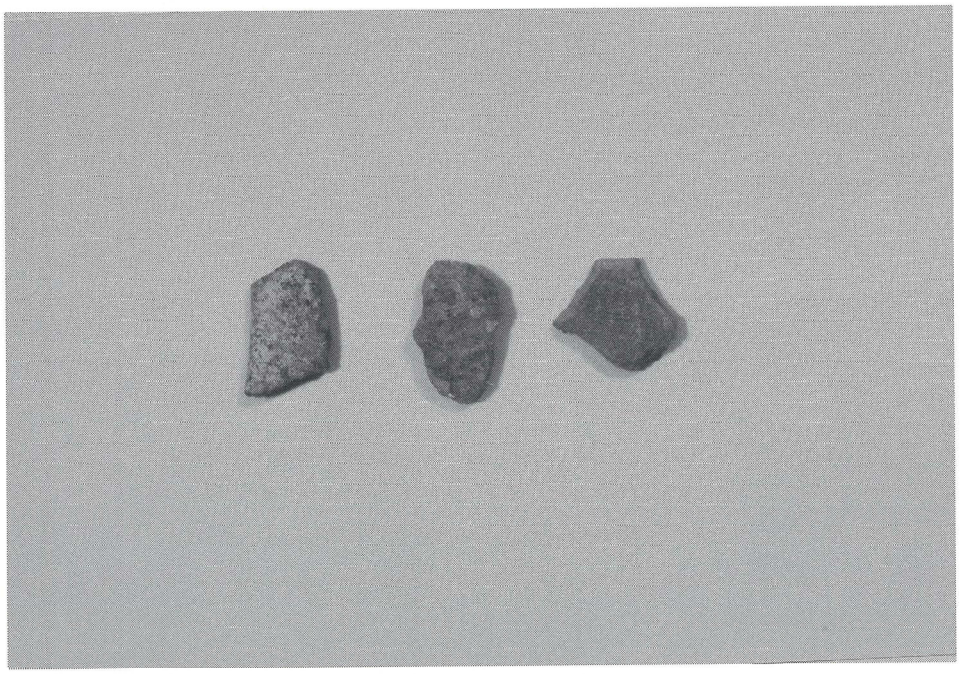

66 表


66 裏

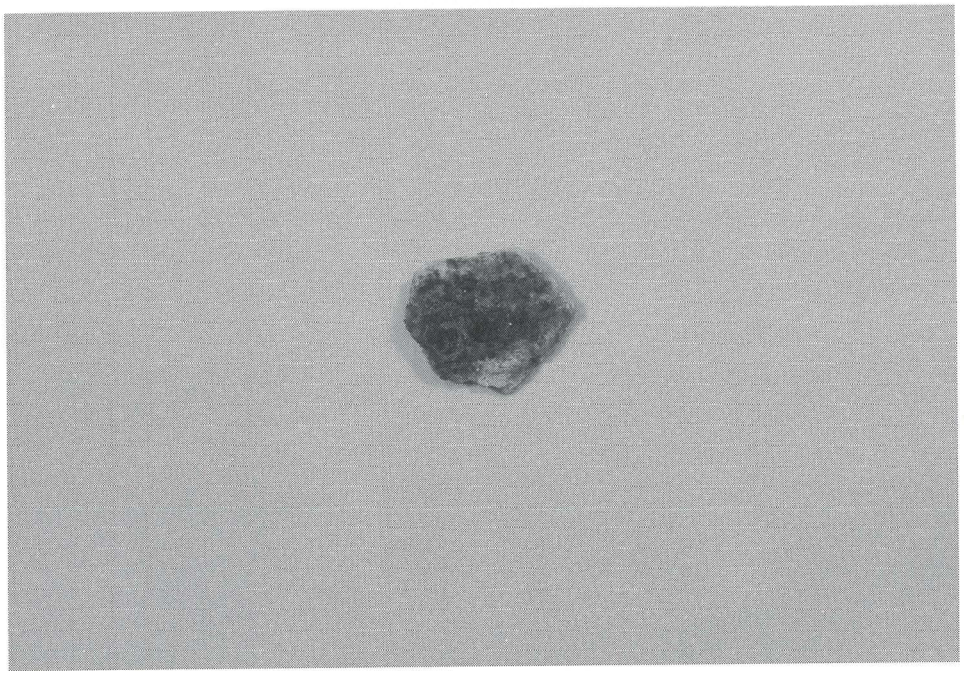
図版19

遺構内出土遺物

P－1



P－2



P－3

報告書抄録

ふりがな	みなみたわらおけがわいせき
書名	南田原桶川遺跡
副書名	銀ビルストアー建設工事に伴う緊急発掘調査
巻次	
シリーズ名	福崎町埋蔵文化財発掘調査概要報告
シリーズ番号	3
編著者名	出田　直
編集機関	福崎町教育委員会
所在地	〒679-2280　兵庫県神崎郡福崎町南田原3116-1　TEL 0790-22-0560
発行年月日	西暦　1999年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
みなみたわら 南田原 おけがわ 桶川	ひょうごけんかんざきぐん 兵庫県神崎郡 ふくさきちょうみなみたわら 福崎町南田原 あざおけがわ 字桶川	28443		34度 56分 52秒	134度 45分 42秒	確認 19980306 ～ 本調査 19980416 ～ 19980417	56 20	銀ビルストアー建設工事に伴う緊急発掘調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
みなみたわらおけがわ 南田原桶川	寺院	中世 旧石器	溝状遺構 柱穴	墨書土器 須恵器、土師器 輸入磁器 旧石器	安徳寺に関連する遺跡と考えられる

福崎町文化財調査報告3

南田原桶川遺跡

1999年3月

編集・発行　兵庫県神崎郡
福崎町教育委員会
神崎郡福崎町南田原3116-1
TEL 0790-22-0560

印　　刷　井上印刷所